



赤い羽根共同募金助成事業

世代や領域を超えて地域をつなぐ学び 若者発 ご近所福祉かるた 活用事例集



静岡福祉文化を考える会

はじめに

「静岡福祉文化を考える会」は、1996年(平成8年)、「静岡発 福祉文化の創造」を掲げて結成し、「実践こそ福祉文化」、「ホッとする、安心・安全な地域づくり」に向けて、29年間の活動に取り組んでいます。「ご近所福祉こそ福祉文化」の検証を県民とともに取り組む中で、「具体的な地域福祉教育教材」の必要性を痛感しました。平成25年・26年の2年間、延べ24回、約243名の若者が、長寿者宅を分散して訪問し、住み慣れた地域で生活する長寿者を取り巻く現状と若い世代に託したい思い・願いを真剣に学び合いました。そして、「これからのご近所のあるべき姿」を、若者の視点で、ご近所のささえあいの議論を積み重ね「平成27年度赤い羽根共同募金助成事業」により、「“若者発”ご近所福祉かるた」(100セット)が誕生。その後、県内各地での取り組みから、更に7年後の令和3年度再び、「赤い羽根共同募金助成事業」により、「“若者発”ご近所福祉かるた」(100セット増刷)と「かるた利用の手引き」(200部)を作成し、「ご近所福祉」の推進に努めてきました。令和6年度「ご近所福祉検証期」を迎えて、このたび「赤い羽根共同募金助成事業」により、「かるた100セットの増刷」(これまでに300セット作成)と、この10年間、各地域・領域におけるかるたの活用状況を調査し「若者発 ご近所福祉かるた活用事例集」として、ここにまとめることができました。作成に当たり、ご多忙の中、漫画家 法月理栄様、協働団体「焼津福祉文化共創研究会」様から多大なご支援をいただきました。ここに、厚くお礼申し上げます。

「若者発 ご近所福祉かるた」の更なる積極的な活用を期待しています。

令和6年 9月30日

静岡福祉文化を考える会

目次

第1章	若者が高齢者から学んだ“ご近所の支え合い”	1
第2章	““若者発”ご近所福祉かるた”誕生から10年	7
第3章	“ご近所福祉検証期”の福祉文化実践からの提言	13
第4章	““若者発”ご近所福祉かるた”には、キーワード満載	16
第5章	紹介します 各世代・領域の活用事例	22
第6章	““若者発”ご近所福祉かるた”でつながる地域 ◇引き続き「活用状況レポート」をお寄せください	38
第7章	資料編 私にとって“ご近所”とは 中学生の意識と実態調査結果から 大人社会への提言	39

若者が高齢者から学んだ“ご近所の支え合い” もっと、積極的に、身近な地域に目をむけること

1. 一体、若い世代は、“ご近所”を学ぶ機会があるのか

「静岡福祉文化を考える会」は、阪神淡路大震災1年後の平成8年9月に誕生して、29年目の福祉文化実践活動に取り組んでいます。

▶ 静岡福祉文化を考える会の原点

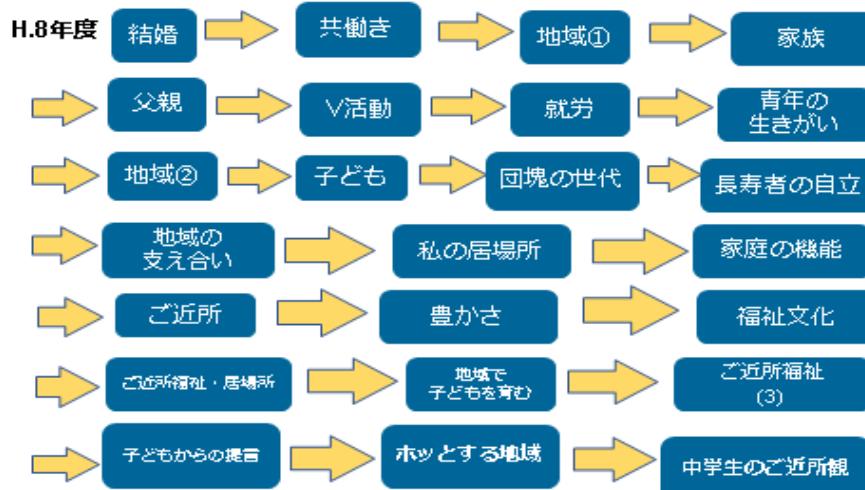
- 1989年 「日本福祉文化学会」設立
- 1995年 阪神淡路大震災
- 1996年 「第11回学会現場セミナー」
- 1996年9月 「静岡福祉文化を考える会」結成

スローガン：「地方発福祉文化の創造」

“人間らしい豊かさをめざして、
今、文化としての福祉を語る”

本会は、当初から、その年度の地域課題をもとに、「調査研究活動」「現場実践検証活動」「地域総合型研修活動」に取り組んでいます。こうした福祉文化実践活動を展開してきた中で、常に「超高齢社会を迎えて、高齢者を取り巻く地域課題」は、重要な議論となりました。

▶ 静岡福祉文化を考える会29年間のアロハの検証



特に、各種の地域福祉計画策定時期を迎えますと、地域社会の現状とこれからを、住民相互にいろいろと意見を交わす「地域懇談会」が開催されます。とかく、こうした地域の懇談会は、あて職的な関係者だけの参加の中で、なかなか本音で意見を出す雰囲気ではなく、総花的な申し合わせでまとめることが多く見受けられているようにも感じました。

しかし、こうした地域の懇談会も、参加の呼掛け次第で、参加者が相互に身近な地域を学び合う貴重な機会にもなっています。障がい児者の家族や、高齢者自らが参加した会場やグループでは、地域総合型研修会的要素をもち、日頃のご苦労を理解し合い、ご近所の支え合いにまでつなげていく議論にまで深まっています。

障がいを持つお子さんがご家族におられる方は、会場で、懇談会の最後に「私の家族に障がいをもつ

た子どもがいることだけでも知っておいて下さい」と、日頃のご苦労を語ることなく、一言だけ話されていた姿に、改めて、私たちの暮らし合う地域には、いろいろな人がいて当たり前であることを、参加者が共有し合った一面でもありました。

▶ 地域は、いろんな人が住んで当たり前



また、高齢者の安否確認の話し合いの場では、地区の役員や民生委員、ボランティアの方々が意見を交わしていた後に、「80代半ばの方が、「高齢者を排他的にしないで下さい。もっと、日頃から、高齢者の出番をつくってはどうですか。」と、提案型意見をされていました。

高齢者を地域で見守る活動について、「意図的な見守り」の仕組みづくりだけではなく、「さりげない見守り」を、高齢者を含めた地域ぐるみで取り組むことが出来る環境を提案していました。

本会では、これまで29年間、常に世代を超えて、共通理解を深めるとともに、本音で語れる環境に努め、「語れる環境こそ、問題を解決する第一歩」をもとに取り組んでいます。

▶ 人間を取り巻く4つの環境



「人間を取り巻く望ましい4つの環境」には、

- 「人的環境」（話れる環境）

話れる環境をつくることこそが、問題解決の第一歩と言われています。しかし、今日では、容易に、物事を解決できる様々な手法が出来るようになり、人々の関係づくりは多岐にわたっています。
- 「物的環境」（地域資源の有効活用）

過去には、それぞれの家庭内に居場所があり、話し合いの場もつくられていました。しかし、今日では、地域の中で語り合う場所づくりが求められています。

- 「空間的環境（ホットする居場所）
- 「自然的環境」（地域の良さの発見）

ここでは、特に、高齢者と向き合う「語れる地域環境」をいかにして作り出せるかを問題提起をしておきます。

本会の活動に、長年関わりを持っていただき、高齢者自身の立場で、語り合う機会があるたびに、力を込めて語られていたことが、つい最近のように感じます。その高齢者は、「ご近所に住んでいて、つくづく感じることは、若い世代に、ご近所のこと、高齢者のことをだれが教えていくのか」「高齢者の気持ちを、特に、若い世代の人に聞いてもらいたいことがたくさんある」「もっと、世代を超えた地域交流が出来るようにしてほしい」等、人生の大先輩である高齢者が、若い世代に託したい思いが、ひしひしと伝わってきました。

2. 長寿者宅を2年間で、延べ24回243名の若者が訪問

本会では、平成20年度から平成26年度までの7年間、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」に取り組みました。

この事業は、長寿者（高齢者）が地域社会から孤立しないために、県民に向けた啓発事業の取り組みでした。

本会は、この大きな社会問題に取り組む課題として「1年次：長寿者（高齢者）の自立」「2年次：長寿社会への課題」「3年次：生活圏域における支えあいの仕組み（ご近所福祉）」「4年次：生活圏域における一人一人の居場所を考える」「5年次：家族ってなに？私の居場所はあるか」「6年次：ここが一番、ホットする私たちのご近所の居場所づくり」「7年次：人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくり—長寿者をつなぐホットするご近所づくりー」を事業のプロセスとして、



- (1) 「地域総合型学習」 延べ41回の「公開型研修会」の開催（延べ約2,000名の県民参加）
 - (2) 「地域実践活動の検証」 35市町のうち、60%の地区で実践展開
 - (3) 「調査研究活動」 7年間、毎年度調査のテーマを設定し、調査に取り組む
- の「3つの柱」をもとに、課題解決に取り組みました。

この7年間の事業展開の中で、平成25年度・26年度の2年間「若者が長寿者から学ぶご近所福祉」を設定し、「長寿者を囲み本音で語る“ご近所福祉”のこれから」を研修テーマに、24回、延べ243名の若者が、地域で、生き活きと暮らしておられる当時98歳の高齢者宅を訪問し、“本音で語る ご近所福祉”を学びました。そして、地域社会で、いろいろと問われている「若者の地域参加」も課題解決の一助にして、考察をすることとしました。

(1)高齢者宅訪問型研修会の全般感想

- ・日頃、高齢者と話をする機会がないので、戦争を経験した話などとても新鮮だった。こうした尊い経験は、後世に伝え、決して風化させてはならない。
- ・今の私たちは、ものの豊かさには恵まれているが、人とつながりは希薄だと再認識した。
- ・高齢者を若者が囲み、自由に話をする環境がとても新鮮だった。
- ・高齢者が、今の社会、ご近所のつながりがないことを大変心配していることを知った。
- ・今、こうして、私たちが安心して生活できるもの、多くの高齢者ががんばって創り上げてくれたからこそと、感謝の気持ちが芽生えた。
- ・高齢者から、力強く毎日充実した生活の話を聞いて、将来、自分もそんな人生を送りたいと思った。
- ・ボランティア活動とは、学び合うことだと実感した。
- ・高齢者の話を聞いて、今の福祉の現状を、我が家と重ねて考えることが出来た。
- ・高齢者だけでなく若者、地域住民が、ご近所について考えることが必要と感じた。
- ・一人ではなく、他者とのつながりで、自分に何ができるか、改めて考えることが出来た。
- ・長い人生を生きてきた高齢者から話を聞き、若い人と高齢者との交流こそ、地域福祉の一歩になることを学んだ。
- ・高齢者の話を聞いて、元気をもらった。また、若者が高齢者に元気を与えることも学んだ。
- ・98歳の高齢者を若者が囲んだ話し合いは不思議な感覚だったが、また話し合いたいという心地よい環境だった。
- ・若者の「居場所」以上に、高齢者にとって「地域の居場所」はすごく大切なことを知った。



(2)若者が、高齢者から学んだ「身内・足元福祉」「ご近所福祉」とは何か

- ・世代を超えたご近所の付き合いがとても大切である。
- ・ご近所福祉の始まりは、挨拶ではじまる事を知った。
- ・最近のご近所づきあいは、希薄になった。家族の中でも会話が少ない。これは高齢者にも問題があり、高齢者は受け身でなく、自分から、働きかけることが大切である。
- ・遠くの親戚より近くの他人（近所づきあい）、いざという



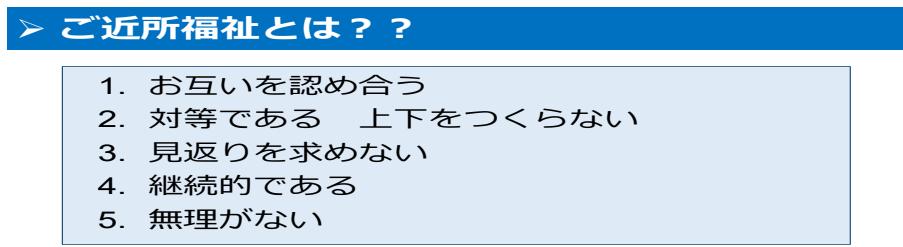
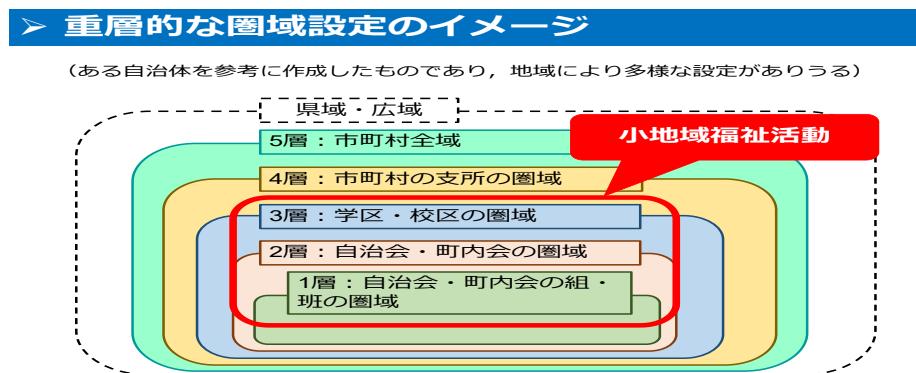
時に助け合える近所づきあいでありたい。

- ・高齢者が参加できる地域の行事を考え、若者も進んで参加し、高齢者と交流する努力をすること。
- ・昔は、便利さよりも、人の温かさがあった。今こそ、こうした地域が必要である。
- ・若者や長寿者ともに、互いに偏見を持たない地域環境が大切である。
- ・隣組が無くなり、地域で孤独、不安な生活をしている高齢者がいることを知った。地域で、お互いに支え合う仕組みづくりが必要である。
- ・常に、地域やご近所の話題や出来事を、家族の中で話し合える環境にしたい。
- ・近所の人との関わりが重要。関わりの中から目標や生きがいを見つけることがある
- ・地域福祉どころか、身内福祉もできていないと実感した。私たち一人一人が何をすべきかを考えて、より良い家庭、地域づくりにつながるように、私たち一人ひとりが努力したい。
- ・世代を超えて、相互に理解し、価値観を共有することが大切である。
- ・周りからの言葉かけや同じ空間（環境）にいるだけで支えになる。
- ・集める地域ではなく、集まる地域環境が大切である。
- ・ちょっとした距離も、高齢者にとっては大変な距離。家族の支援を得て、地域に積極的に出ていこうとする努力が必要である。
- ・損得を考えず、ご近所づきあいは、感覚で行われるものだと理解できた。
- ・ちょっとした一言で、高齢者が、地域に必要とされていると感じるよう周囲が努めること。
- ・監視されているような意図的な見守りの仕組みではなく、日頃からさりげない見守りに心掛ける。
- ・ご近所との付き合いが、生きがいや地域の一体感を生み出すきっかけとなる。
- ・近所なのに知らない人や関わらない人が多くならないように、他人⇒他者⇒自己という関係をつくっていきたい。
- ・「家族に見捨てられた」と感じている高齢者が多い。
若者は、日頃から、積極的に、高齢者に接することが大事だと感じた。
- ・私にとって、「福祉」は、大変難しいことだと感じていたが、日頃のさりげない声掛けや挨拶、助け合い、思いやり（親切）等、普段の生活の当たり前のことを心掛けていくことだと感じた。
- ・福祉制度、サービスや専門の資格保有者が、地域社会のことを全て解決してくれることだと思っていたが、身近にいる人が、だれでも、手を差しのべることが大切なことだと感じた。



(3) 「高齢者に関する福祉課題」の解決に向けて、地域社会で何が出来るか

- ・高齢者を取り巻く家族だけでなく、ご近所に住む若者も、高齢者の問題を一緒に考える機会をもつ。
- ・地域の中で、コミュニケーションが少なすぎるので、世代を超えて語れる環境に努める。
- ・地域の福祉施設に、ちょっとした交流スペースがあれば、人が集まり交流が出来る。
- ・地域貢献（自分たちの地域は自分たちが一番知っている 守れるのも自分たち）への努力。
- ・高齢者に対する負のイメージを持たないように、高齢者を理解する地域環境に努める。
- ・近所の高齢者の、ちょっとした変化に、気づくように心掛ける。
- ・日頃から、ご近所同士の濃いつながりを持つこと。 冠婚葬祭など、昔は地域で行っていたことを聞いて驚いた。 隣近所の人を、家族だと思うと温かく深いつながりになると感じた。
- ・高齢者は、特に、男性の地域参加が少ないように伺えた。
男性が参加しやすい地域環境を日頃からつくれるように努力をしていく。
- ・昔のことを、高齢者から教えてもらうだけでなく、今の社会の大きな変化（流行）を高齢者に伝え相互理解していくことも大切だと感じた。
- ・昔は、地域の人が、寄り集まって、楽しい時間を過ごした貴重な経験を、今の社会に合わせて、「集まる」場所を工夫していきたい。
- ・専門家にだけ、任せきりにするのではなく、地域の一員である私たちに何が出来るか実践していく。
- ・まずは、身近な地域の課題を知ることから、地域に関心をもつ努力をしていきたい。
机上論ではなく、実際に、現場に出向き、高齢者とのふれあい交流する努力をしていく。
- ・経験豊かな高齢者をもっと敬うことが大切である。
- ・地域の歴史やつながりは、しっかりと後世に受け継がれるべきもの。若者が能動的になるべき。
- ・大人は、もっと若者に任せ、チャンスを与える。（自己意識を持つ）
- ・難しいことをするのではなく、ごく当たり前に、まずは家庭から声掛け(家庭の輪)をする。



ご近所福祉 ≒ おすそ分け

第2章

「“若者発”ご近所福祉かるた」誕生から10年

1. “ご近所福祉”取り組みのプロセス

本会が“ご近所福祉”を活動の主軸にして取り組んできた経過は、次の通りです。

年度	活動テーマ/主な活動内容
平成20年度	<p>「高齢者の自立」</p> <p>■静岡県委託事業①「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(4回)：「高齢者と生きがい」「ホッとする居場所」「ご近所福祉 i nぬまづ」「高齢者とともに暮らす 共生社会づくりの担い手は一体誰」</p> <p>(2)実践地区活動(4地区)：沼津市 旧富士川町 掛川市 袋井市</p> <p>(3)調査研究活動：「高齢者の生きがい その意識と実態調査」</p>
平成21年度	<p>「長寿社会づくり」</p> <p>■静岡県委託事業②「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(6回)：「共生社会と福祉文化」「私にとって、心安らぐ居場所とは（袋井市現地セミナー）」「ご近所福祉 i nぬまづ②」「協働による福祉社会構築と福祉文化を語る」「高齢者とともに小地域をつなぐ仕組みづくりの実現に向けて」「ご近所福祉イン小川」</p> <p>(2)実践地区活動(4地区)：小山町 伊豆の国市 焼津市小川第11自治会 菊川市</p> <p>(3)調査研究活動：「長寿社会に関する県民意識と実態調査」</p>
平成22年度	<p>「生活圏域の支え合い」</p> <p>■静岡県委託事業③「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(6回)：「ひとりでも安心して暮らせる地域づくりの条件」「これからのご近所の支え合いはどうなるの？」「ご近所福祉 i nぬまづ③」「これから のサロン・居場所は、何をめざすのか」「これからのご近所づくりの原点を探る」「これまでとこれから・・・生活圏域の支え合いの仕組みづくり」</p> <p>(2)実践地区活動(5地区)：藤枝市 磐田市 富士宮市 西伊豆町 沼津市</p> <p>(3)調査研究活動：「生活圏域の支え合いとは何か 本音に迫る調査」</p>
平成23年度	<p>「生活圏域の一人一人の居場所を考える」</p> <p>■静岡県委託事業④「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(5回)：「これまでとこれから 静岡発 福祉文化の創造」「世代を超えて、ご近所の支え合いを語ろう」「ご近所福祉 i nぬまづ④」「世代を超えて 福祉文化を語ろう」「共生社会実現への道程」</p> <p>(2)実践地区活動(4地区)：富士宮市 西伊豆町 川根本町 袋井市</p> <p>(3)調査研究活動：「地域と私の居場所その意識と実態調査」</p>
平成24年度	<p>「家族ってなに？ 私の居場所を考える」</p> <p>■静岡県委託事業⑤「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(7回)：「ご近所とつながる家庭機能を考える」「誰が担う つながる地域 支えあう地域」「ご近所福祉 i nぬまづ⑤」「地域に私の居場所ありますか」「これまでの家族 からの家族」「一人でも安心して暮らせる地域とは」「ご近所福祉実践事例から学ぶ」</p> <p>(2)実践地区活動(6地区)：熱海市 牧之原市 西伊豆町 掛川市 富士宮市 沼津市</p> <p>(3)調査研究活動：「私にとって、家族ってなに？その意識と実態調査」</p>
平成25年度	<p>「ここが一番、ホッとする私たちのご近所の居場所づくり」</p> <p>■静岡県委託事業⑥「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(6回)：「つながるご近所の再構築の決め手は？」「これからのご近所を創る」「ご近所福祉 i nぬまづ⑥」「実践事例からご近所の支え合いを学ぶ」「誰がご近所福祉を創るか」「長寿者から学ぶご近所福祉」</p> <p>(2)実践地区活動(7地区)：熱海市 牧之原市 長泉町 島田市 御前崎市 沼津市 森町</p>

	(3)調査研究活動：「ホッとするご近所づくり その意識と実態調査」
平成 26年度	<p>「人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくり」</p> <p>■静岡県委託事業⑦「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(5回)：「豊かに暮らし合う地域を語ろう」「地域の豊かさとは何か」「一人一人が豊かに暮らせる地域を語ろう」「鈴木君なぜ地域参加するの？山田君なぜ地域参加しないの？」「静岡発 福祉文化の創造を検証する」「長寿者から学ぶご近所福祉」</p> <p>(2)実践地区活動：6年間の実践地区(21市町30地域)を検証する(県内60%)</p> <p>(3)調査研究活動：「豊かに暮らせる地域づくり その意識と実態調査」</p>
平成 27年度	<p>「静岡発 福祉文化の創造による豊かに暮らせる生活圏域の地域づくり」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(8回)：「豊かな地域づくりを語ろう」「地域住民が集まる居場所とは」「私の地域を知っていますか」「語れる地域環境とは」「地域の福祉課題解決に、地域の資源を掘り起こす」「福祉文化と地域の豊かさ」「地域の福祉情報の共有化」「当たり前のことが当たり前にできる地域とは」</p> <p>(2)調査研究活動：「若者の地域参加 その意識と実態調査」</p> <p>★赤い羽根助成事業：「ご近所福祉かるたの創作と地域学習の開拓事業」</p> <p>(1)「共創社会実現研究会」設置(12回開催)</p> <p>(2)「若者発“居場所”あり方研究会」設置(9回開催)</p> <p>(3)「若者発 ご近所福祉かるた」作成(100セット)と配布提供(35箇所)</p>
平成 28年度	<p>「静岡発福祉文化の創造とご近所福祉」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(4回)：「静岡福祉文化を考える会 これまでとこれから」「いかに、地域性を發揮したご近所福祉を創るか」「静岡発 福祉文化の創造とご近所福祉を総括する」「静岡発 福祉文化の創造と豊かなご近所福祉づくり」</p> <p>(2)調査研究活動：「ご近所福祉 その意識と実態調査」</p>
平成 29年度	<p>「ご近所福祉で集まる地域ぐるみの居場所を拓く」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(4回)：「ご近所福祉と居場所」「ささえあう地域ぐるみの“居場所”づくりを拓く」「地域ぐるみの居場所をめざす」「静岡発 福祉文化の創造と木々とする居場所」</p> <p>(2)調査研究活動：「居場所ってなに？その意識と実態調査」</p>
平成 30年度	<p>「子どもを育む地域づくりとは」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(4回)：「福祉文化と子どもを育む地域づくりを考える」「支え合う地域ぐるみの“子供の居場所”を考える」「子どもたちが安心して暮らせる地域づくりとは」「静岡発 福祉文化の創造と子どもの支援を考える」</p> <p>(2)調査研究活動：「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査①」</p>
令和 元年度	<p>「子どもを育む福祉コミュニティの再構築と地域ぐるみの支え合いの仕組みづくり」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(4回)：「子どもと福祉文化を語ろう」「地域の子ども支援の実践に学ぶ」「大人が変わる、地域が変わる、子どもが変わる ホッとする地域とは」「静岡発 福祉文化の創造と子ども」</p> <p>(2)調査研究活動：①「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査②」 ②「256名の子どもたちに聞きました ホッとする地域ですか」</p>
令和 2年度	<p>「つながるご近所の再構築、決め手は一体何か（ご近所福祉の復活）」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(4回)：「私のご近所 これからのご近所を創る」「ご近所を診断する」「これで安心 ホッとするご近所」「ホッとするご近所の支え合いは誰が創るのか？」</p> <p>(2)調査研究活動：「ご近所福祉 その意識と実態調査」</p>
令和 3年度	「地域を家庭化する“ご近所福祉”をつくる仕組みを探る」

	<p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(4回)：「ご近所福祉 その意識と実態から、課題提起を探る」「住民福祉教育の成果とご近所福祉かるたの活用」「地域を家庭化する“ご近所福祉”を創る支え合いを探る」「ご近所福祉と福祉文化」</p> <p>(2)調査研究活動：「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました調査」</p> <p>★赤い羽根助成事業：「若者発ご近所福祉かるたの活用拡大と住民福祉教育開拓事業」</p> <p>(1)「共創社会実現研究会」設置（6回開催）</p> <p>(2)「若者発 ご近所福祉かるた利用の手引き」作成(200部)</p> <p>(3)「若者発 ご近所福祉かるた」増刷作成（100セット）と配布提供（47箇所）</p>
令和 4年度	<p>「ホッとする豊かな地域づくりを拓く“共生社会”を探る」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(4回)：「静岡発 福祉文化の創造 26 年間のプロセスを探る」「ホッとする豊かな地域づくりは誰が担うのか？」「ホッとする豊かな地域づくりを描く」「“ご近所福祉”から描く福祉文化」</p> <p>(2)調査研究活動：「ホッとする安心した地域づくり その意識と実態調査」</p>
令和 5年度	<p>「世代や領域を超えた、つながる“ご近所福祉”を描く」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(3回)：「静岡発 福祉文化の創造とは～福祉文化の原点を探る～」「世代や領域を超えたつながる“ご近所福祉”を描く」「教育と福祉の融合と“福祉文化”」</p> <p>(2)調査研究活動：「私にとって“ご近所”とは 中学生の意識と実態調査」</p>
令和 6年度	<p>「見える・わかる“ご近所福祉”こそ福祉文化」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(3回)：「“ご近所福祉”これまでとこれからを語る」「福祉文化の歩みから見えたもの」「“ご近所福祉”的見える化・わかる化を検証する」</p> <p>(2)調査研究活動：「若者発 ご近所福祉かるた活用状況調査」</p> <p>★赤い羽根助成事業：「若者発ご近所福祉かるたによるご近所福祉検証事業」</p> <p>(1)「共創社会実現研究会」設置（8回開催）</p> <p>(2)「若者発 ご近所福祉かるた活用事例集」作成（200部）</p> <p>(3)「若者発 ご近所福祉かるた活用状況調査」実施（46カ所中 29 箇所回答）</p> <p>(4)「若者発 ご近所福祉かるた」作成（100セット）と配布提供（51箇所）</p>

平成に入り、全国的な社会問題として「高齢者の孤立死・孤独死問題」が大きく取り上げられました。本会は、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」に、平成 20 年度から 26 年度まで 7 年間にわたり取り組むことになりました。若者と大人が向き合う「公開型研修会」（延べ 39 回、約延べ 1,200 名参加）の開催をはじめ、実践地区検証事業（35 市町のうち 21 市町・30 カ所、全県の約 60% 実施）、そして、児童から高齢者の領域にまたがる、世代を超えた調査研究活動を中心に、課題解決に向けた事業を展開し、ここから「ご近所福祉」を浮き彫りにし、県民に広く課題提起をしました。多くの若者が参加した各種の研修会から整理した 400 もの意見を「共創社会実現研究会」や「若者発 “居場所”あり方研究会」を立ち上げて、世代や領域を超えた“ご近所福祉の再構築”を議論し整理をしました。

身近な地域を「見える化」「わかる化」していく「地域福祉教育教材」として、「かるた」の制作が提案され、整理した 400 もの意見をもとに、「読み札」を精査する作業にも着手しました。

2. 「見える化」「わかる化」の「地域福祉教育教材」をめざす

議論をまとめた中で「かるた」制作実現に向けて、「赤い羽根共同募金助成事業」申請の準備を 1 年かけて取り組みました。

■「平成27年度「「ご近所福祉かるたの創作と地域学習の開拓事業」の企画書では、まだまだ語り続けたい“ご近所福祉論議”を、昔から今日まで、四季を通じた日常生活のあそびや学びの中に取り入れられている「かるた」を素材として、これからのが“ご近所福祉”を幼児から大人まで、世代を超えて、身近な地域の実践活動の場や行事の中で、「地域総合型学習」としての学習教材として提供し、楽しみながら安心して暮らし合う生活圏域づくりをめざす、これからのコミュニティづくりに、啓発啓蒙の福祉活動や福祉コミュニティの仕組みづくりなどの現状課題を改善・解決できるように、実社会を具現化した“若者発 ご近所福祉かるた”(100セット)を制作する。

- 着眼項目 (1) 「これまでのご近所」を紹介しあう学びの場を創る
- (2) 「これからのご近所」「私の納得するご近所」を創る
- (3) 「高齢者がほっとするご近所」を語り合う場を創る
- (4) 「ご近所福祉」を実践する場を創り、地域課題の解決の第一歩を創る
- (5) コミュニケーションの輪を広げる場を創る

○製作過程

- *「本会委員会」「共創社会実現研究会」「若者発居場所あり方研究会」「各種公開型研修会」等の場で取り組む。
- *創作に関する指導助言・協力は、これまで、本会の活動に対してご支援ご協力をいただいた関係者との日常的な連携を深めながら取り組む。
- *作画(「読み札」)については、漫画家 法月理栄様の全面的な協力をいただき、具体的な協議(福祉現場見学等)をする。

■「令和3年度「若者発 ご近所福祉かるたの活用拡大と住民福祉教育開拓事業」の企画書では、平成27年度赤い羽根助成事業として完成した「若者発 ご近所福祉かるた」(100セット)は、尊い「赤い羽根共同募金」により制作した意義や、いかに生活圏における支え合いのしくみを構築するか、広く県民に課題提起をしていくことが目的であり、「焼津福祉文化共創研究会」と協働で積極的に地域福祉の推進に、有効活用するよう「地域総合型学習」を働きかける。

これからの地域づくりは、若者層が地域に関心を持ち、積極的に地域参加できる地域環境を創り出すことを期待し、あえて、「若者発」を大きくクローズアップした意義を強調し、大人社会が、こうした地域環境を提供出来るか検証する。

そして、令和3年度は、下記の内容を展開してきました。

- (1) 平成27年度に配布・設置した関係団体・グループ等の活用状況等を把握
- (2) 「共創社会実現研究会」設置(4回開催) カルタ活用検証、「手引書」作成、課題整理
- (3) 「若者発 ご近所福祉かるた」の増刷(100セット)と有効配布提供
- (4) 「若者発 ご近所福祉かるた利用の手引き書」の作成と地域づくりの検証
- (5) 「協働」による取り組み(焼津福祉文化共創研究会等)
- (6) 県内各地で、実践的検証をもとに、世代を超えた有効活用方法による地域課題解決の検証

児童福祉領域(学童保育)や、学校教育領域(特に、コミュニティスクール事業関連)をはじめ、世代間交流の領域、高齢者の教養研修の場、社会教育領域(地域講座)等に配布提供して、10年が経過しました。

これまで「かるた」を利用した、各種団体からの「活用レポート」(活用報告)をもとに、令和6年度赤い羽根助成事業は「若者発 ご近所福祉かるたによるご近所福祉検証事業」により、「かるた増刷・配布提供(100セット)」と、「若者発 ご近所福祉かるた活用事例集」を作成する運びとなりました。

世代を超えて、“ご近所福祉”を学び合った研修会の数々



*若者も、大勢の大人の前では緊張してしまい・・・



*世代を超えた研修会では「初めまして」の名刺交換から



*なかなか、私のご近所が浮かばない若者



*思い切って、ご近所を「短冊」に書いてみたら・・・



*多くの大人が参加して、ご近所を大いに語り合った



*ご近所での出来事を寸劇で紹介してみた



*出来上がった「かるた」を紹介



*「絵札」の制作にあたられた漫画家の法月様と対談



*「かるた」の制作にかかわった委員の皆さんのが検証



*「かるた」の活用方法を議論する

第3章 “ご近所福祉検証期”の福祉文化実践からの提言

1. そもそも、「静岡発 福祉文化の創造」は、どこから？

福祉の改善・改革を「文化」の視点から研究・議論・実践する目的で、「福祉の文化化」「文化の福祉化」を掲げ、地域社会の様々な領域から、理論と実践をもとに 1989 年「日本福祉文化学会」が設立され、全国各地の福祉現場の実践家と福祉系を中心とする大学等の研究者の強固なネットワークにより歩み続けています。

「日本福祉文化学会」の主要事業の一つに、現場に学ぶ福祉文化の取り組み「現場セミナー」があります。静岡県内では、これまで、1993年4月に静岡市内の先進的福祉施設において「第5回現場セミナー」開催の実績があります。その後、福祉文化を地域社会全体に切り拓くテーマで地域社会をフィールドとした「第11回日本福祉文化学会・現場セミナー」の開催を静岡県内で開催してほしい旨の要請を受けました。

意義ある「現場セミナー」の開催実現には、まず、広く県域に「福祉を文化にする、文化としての福祉を築く」ことに賛同する県民の呼びかけから始めなければならないと、早速、準備に取り掛かりました。そして、10代から70代の約40名が実行委員会結成に賛同され、企画運営、広報等多岐にわたる働きかけにより、1996年3月浜松市で開催することが出来ました。

セミナーの第1日目は、「浜松こども園」を会場に「福祉施設の現場実践に学ぶ」と題して、先駆的実践発表がありました。

第2日目は、プレスターに会場を移し「基調講演」を、学会初代会長 一番ヶ瀬康子氏が、阪神淡路大震災の政府復興委員の立場から震災と福祉文化をもとに「21世紀にむけて 福祉文化を拓く」を熱く語られました。

その後、「災害と福祉文化」「働く人たちと福祉文化」「環境と福祉文化」「高齢者・障害者の余暇文化」の4つの分科会で参加者が熱心に議論を深め合いました。

フィナーレは、「静岡で語ろう、“福祉文化”を身近な地域から、自立と共生の21世紀へ」をテーマに総括討論をしました。2日間、全国各地から延べ約400名が参集された現場セミナーでした。

この尊いセミナーのプロセスと成果を「静岡発福祉文化の創造」と置き換えて、県内に発信しようと、1996年9月、ここに「静岡福祉文化を考える会」が阪神淡路大震災1年後に誕生しました。

その後、本会は、福祉文化実践活動に取り組む中で、2000年1月には、静岡県内では3回目となる「第18回日本福祉文化学会現場セミナー」を掛川市の「ねむの木学園」において「宮城まり子さんと福祉文化に学ぶ」をテーマに開催しました。

初代会長一番ヶ瀬康子先生と宮城まり子さんとの「福祉文化」を熱く語り合う対談から、「足元の福祉」「共生社会こそ福祉文化」を全国から参加した350名の皆様とともに学び合いました。



2. 29年間の活動のプロセスから「ご近所福祉検証期」が見えた

本会は、「さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人と市民がいっしょに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考え、その改善のために努力する。」を活動目標にしています。

そして、[3つの活動基調]

- (1)さまざまな分野で活動する人が、専門分野と世代を超えて交流を図る。
 - * 「市民性と専門性」「理論と実践」を『融合』する努力
- (2)会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に拓かれた活動をする。
 - * 「公開型研修会」で市民性を高める努力
- (3)既存の福祉組織活動から取り残された問題や新しく発生した問題を大切にし、常に市民生活に密着した活動をする。

具体的な「3つの柱立て」として、

- (1)調査研究活動
県民の協力により、一貫して、その時代の地域社会の問題をテーマに、調査活動に取り組み、その結果を、県民とともに地域総合型学習において、課題解決の議論を深める。
- (2)啓発学習活動
県内各地のさまざまな実践活動を「静岡発 福祉文化の創造」の視点で学び合う。
- (3)実践地区活動
県内各地の実践活動事例を共有し合い、それぞれの地域性を「地域診断」し合う。

大きな福祉文化の流れの中で、振り返ると、本会29年間の流れは、次の5期にまとめられます。

◇第1期 草創期 本会結成から実践活動6年間

平成8年度結成当時、若い世代を中心とした会員層であり、「結婚」をもとに「おいしい結婚、まことに結婚」論議を展開。その後、家庭を持った中で「共働き」を検証。「地域にどう溶け込めるか」「私たちにとって、地域とは何か」と活動を展開。希薄化した「家族・家庭の機能」を考える「私たちにとって家族とはなにか」の議論を深めた。「家族ってなにか?」の中に、「父親不在ではないか、父親の復権こそ必要と、「父親とは何か」につなげた。そして、平成13年度「ボランティア国際年」を迎える、「真のボランティア活動とは」を活動テーマに掲げた。

◇第2期 協働期 日本福祉文化学会全国大会静岡大会（平成14年）から6年間

平成12年度に「平成14年度第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会」開催決定を受け、改めて、「静岡発 福祉文化の創造」を基盤に参集した70名の同士とともに、議論を重ね、「富士山麓 いのちと暮らしによりそう福祉文化の創造」を大会テーマに、県内外から約650名が参加し、「静岡発 福祉文化の創造」の議論をさらに深めた。

こうした取り組みから、県内の関係機関・団体、学校との協働による取り組みが展開された。

この6年間の議論では、「大人と青年の生きがいと就労」「地域社会を誰が担うか」「子どもを取り巻く地域環境を問う」「団塊の世代の役割は何か」等常に地域の身近な課題を活動とした。



◇第3期 実践融合期 平成20年度から27年度まで、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業（長寿者の孤立防止）」に取り組んだ7年間

本会では、「高齢者」の用語を使用せず、一貫して「長寿者」の表現をして、委託事業に取り組んだ。「長寿者の生きがい・自立」「長寿者への情報提供のあり方を問う、日常生活と福祉情報」「長寿社会を問う」「生活圏域における支え合いとはなにか本音に迫る」「地域と私の居場所」「真の居場所を正す、家族とは何か」「家庭・家族機能」「長寿者とつながる ホッとするご近所づくり」「豊かに暮らせる地域づくり」などを検証しながら、一人一人が豊かに暮らし合う地域づくりは、一体誰が担うのかを問い合わせた。この時期、県内各地域・福祉施設において「ご近所福祉の集い」や、「共生社会を学ぶ集い」の活動が活発に展開された



*「ご近所福祉 in 沼津」は6年間続く
福祉施設・企業・福祉団体等と協働で取り組む



*焼津市では、自治会単位で「ご近所福祉の集い」開催
この時結成した「浪藏劇団」は、現在400回を超える公演に



*西伊豆町では、近隣町との協働で「セミナー」を開催



*本会と共催で「福祉施設」が一般市民と共に「共生社会」を学ぶ

◇第4期 共創社会実現期 平成27年度から令和元年度までの5年間

「生活圏域の地域づくり」「ご近所の助け合い」「若者の地域参加」「ご近所福祉の現状を検証」「居場所とは何か」「子どもを育む地域づくり」「ご近所福祉の再構築」「子ども発 地域づくり」「地域ぐるみの支え合いの仕組み」等を活動テーマに取り組んだ。

◇第5期 ご近所福祉検証期 令和2年度から現在までの5年間

これまでのプロセスから、令和2年度は「つながるご近所の再構築—ご近所福祉の復活—」を活動テーマに掲げ、その翌年の令和3年度は、「地域を家庭化する支え合いの検証」そして、令和4年度「ホッとする豊かな地域づくりを拓く—共生社会実現を探るー」、令和5年度「世代や領域を超えた、つながる“ご近所福祉”」に取り組んできた。そして、令和6年度「見える・わかる“ご近所福祉”こそ福祉文化」を掲げ、ここまで、29年間「静岡発 福祉文化の創造」を発信して取り組んできた「福祉文化実践活動」は今、ここに「“ご近所福祉”こそ福祉文化」にたどり着いた。

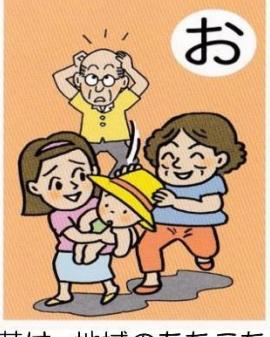
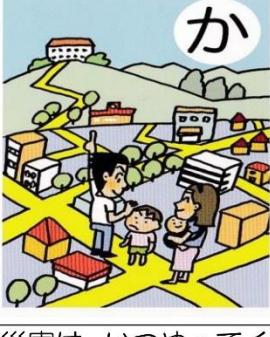
3. 「福祉と教育の融合」から“ご近所福祉”を実践してきた一面も

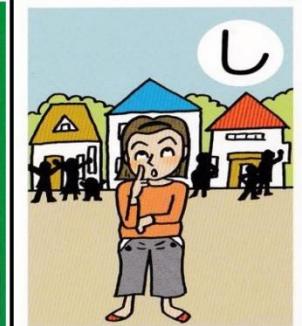
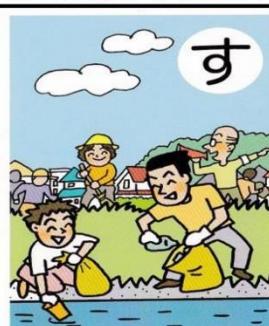
本会では、この29年間の実践活動の中で、社会教育と社会福祉の接点を地域社会の中で試みたことが幾度かありました。それは、「長寿者に学ぶご近所福祉からの問題提起」や「ボランティア活動を福祉と教育の別々で学び合うことへの疑問」から、これらをつなぎあわせ、融合できないか、若者の地域総合型学習の問題提起からの気づきでした。

第4章 「“若者発”ご近所福祉かるた」にはキーワード満載

ここでは、「若者発 ご近所福祉かるた」46コマを紹介します。ご近所福祉を理解していただくために、各かるたには、「キーワード」を組み入れています。活用目的により、一枚一枚に託されている「キーワード」を基に、学び合いを深めて下さい。主な「キーワード」を紹介します。

1.おすそわけ 2.情報伝達 3.趣味・特技を地域活動に活かす 4.地域ぐるみの福祉教育 5.子どもの見守り 6.家庭機能(家庭力) 7.感謝の心 8.若者の地域参加 9.他者との関係づくり 10.子どもの居場所 11.防災意識強化
は家庭から 12.いつでもどこでもボランティアチャンス 13.防犯(安全) 14.健康 15.子育て支援 16.仲間づくり 17.さりげない声かけ 18.地域づくり 19.世代間交流 20.地域福祉 21.専門性と市民性の融合 22.環境美化 23.コミュニティリーダー 24.共生社会 25.支え合い 26.居るだけのボランティア 27.集まる地域の居場所 28.長寿者の社会参加 29.コミュニケーション 30.さりげない見守り 31.おせっかい屋さん(世話やきさん復活) 32.地域文化 33.ふれあい 34.地域課題の把握 35.コミュニティ 36.小さな親切 37.ご近所福祉 38.生きが 39.地域行事 40.相互理解 41 福祉文化の創造

	<p>あ</p> <p>優やさしこう あ りがとう お すそ分け</p>		<p>い</p> <p>温ぬくもり 居あたたか まちこのあ</p>
おすそ分けは、物だけではありません。心を添えた「おすそ分け」を心掛けましょう。対等で見返りを求めない、継続な信頼関係づくりが大切。	今、地域づくりに「居るだけのボランティア」は欠かせません。若者も長寿者も、身近な地域に、姿を見せてはいるだけで、心がホッコリ。		
	<p>う</p> <p>応援うなづき 運動うんどう ご近所うんじょ みんなうんぬん</p>		<p>え</p> <p>顔会うなじみ 通とおれ 会えらぶ 祭えらぶ して</p>
運動会等地域行事には、老若男女、地域住民が多く集まります。こうした伝統行事で「地域ぐるみの居場所づくり」を継続したいものです。	見知らぬ人でも、すれ違った時には軽く会釈を心掛けましょう。それだけで「他者との関係づくり」、そして、信頼関係が生まれてきます。		
	<p>お</p> <p>おしゃべり 思おもひ 話をやく ようとも</p>		<p>か</p> <p>避ひなな 話はな 家かぞく 族とも 難みち</p>
昔は、地域のあちこちに世話焼きさん(おせっかいやさん)がいました。人々や地域をつなぐ「世話やきさん」復活を期待したいものです。	災害は、いつやってくるかわかりません。日々の生活の中で、家族で話し合い、「日頃の防災意識」を強める努力をしていきましょう。		

	<p>き</p> <p>見つかけを ボランティアで広げる</p>		<p>く</p> <p>光み暗る道で見守る</p>
<p>いつでも、どこでも、「ボランティア活動」のチャンスがあります。日頃から、身近な地域社会に目を向けて、きっかけを見つける努力をしていきましょう。</p>		<p>ご近所みんなが、日頃から、声を掛けあい、積極的に、安心・安全な地域づくりを心掛けましょう。「ご近所力（近助）」で防犯（安全）強化をしていこう。</p>	
	<p>け</p> <p>支え合い見守る健康を優しさ</p>		<p>こ</p> <p>探語子育てはされる先輩</p>
<p>一人より二人、二人より三人と、みんなが集まるときも、一緒に歩みを進めましょう。ご近所さん同士で「健康づくり」で「地域の輪」をさらに広げましょう。</p>			<p>日頃から、世代を超えて、語れる環境に努め、気軽に、ご近所さんへの歩み寄りで、実体験から「子育て支援」で悩みが解消します。</p>
	<p>さ</p> <p>仲間いるさみしくないよ</p>		<p>し</p> <p>お向かいさんお隣り家族</p>
<p>地域には、いろいろと悩みを持った人、孤独な人がいます。明るく、長生きの秘訣は地域の「仲間づくり」から始めましょう。</p>			<p>これまでの災害の教訓から、「ご近所さん」は頼りになります。普段から「隣組」との関わりをもったお付き合いを心掛けましょう。</p>
	<p>す</p> <p>住みやすいまちはみんなで創るもの</p>		<p>せ</p> <p>埋めてつなげまちづくり世代差を</p>
<p>リーダー（町内会長・民生委員・組長等）にだけおまかせでは、本当の地域づくりではありません。「住民一人ひとりの地域参画」で、ホッとする地域づくりをめざしましょう。</p>		<p>日頃から、あいさつをして「世代間交流」に心掛けましょう。若者の言い分、そして、大人の言い分をしっかりと聴き合い（傾聴）、相互理解に努めましょう。</p>	



日頃から、さりげなく、そばにてくれるだけでいい家庭環境で、「居るだけのボランティア」に心掛けて、ご近所でも、「癒される人間関係」を心掛けましょう。

少子超高齢社会の今だからこそ、地域住民一人一人がお互いに歩み寄り、アイディア（知恵）を出し合い、地域ぐるみで「地域福祉」を推進しましょう。



昔から今日まで、最も身近な情報伝達手段の「回覧板」。内容を家族みんなで理解し合い、お隣さんに一声かけて早く廻しましょう。



何かひとつは、他人に誇れる趣味・特技を誰もが持ち合わせています。「地域デビュー」で、生きがいづくりに心掛けていきましょう。



穏やかで、笑顔のあふれるつながりが、良い人間関係が継続されます。「さりげない付き合い」で、より良い人間関係を創りましょう。

 <p>ぬ</p> <p>語り合い サロかたンの仲間と ぬくもりは なまけ</p>	 <p>ね</p> <p>助け合い 地域の隅々 ねづみする 根付いてる</p>
<p>「集まるサロン」は、自発的に自由に、対等で、そして本音で語り合えて、いつも笑顔がいっぱいです。「集めるから集まるサロン」こそ、「真の地域ぐるみの居場所」です。</p>	<p>助け合い・思いやりの輪は、私たちの地域の隅々まで広げなければなりません。世代や領域を超えて、みんなで実践して、「地域の福祉力」を高めていきましょう。</p>
 <p>の</p> <p>福思伸ばそうよ 祉の芽</p>	 <p>は</p> <p>地域勇気初めの一歩 デビュー</p>
<p>住み慣れた地域で、思いやりやお互い様の気持ちを広げたいものです。みんなで「地域ぐるみの福祉教育」を心掛けていきましょう。</p>	<p>ボランティア活動を始めるには、一寸とした勇気が必要です。さあ、思い切って「はじめの一歩」で、私発のボランティア活動を始めよう。</p>
 <p>ひ</p> <p>一帰日暮れ時 る子<small>こども</small>に</p>	 <p>ふ</p> <p>親子の会話 ふれあいは さりげなく</p>
<p>子どもの安全・安心をいかに確保していくか、今、社会全体の問題となっています。地域全体で取り組もう、「子どもの見守り・声かけ」を。</p>	<p>ふれあいの濃さは、時間の長さではありません。「さりげない日常会話（家庭機能）」で「家庭力」を大いに向上させましょう。</p>
 <p>へ</p> <p>付感返事に 受け加え感謝の心 にも気持ち</p>	 <p>ほ</p> <p>声近ほめ言葉 を掛け</p>
<p>「ハイ」という返事だけでは、相手にすべてが伝わりません。思いやりの気持ちも添えて、「常に、感謝の心」を忘れないようにしましょう。</p>	<p>我が子だけでなく、近所の子ども達も常に見守りたいものです。近所の子にも声を掛けて「地域の子どもを地域で育む」福祉力の向上を目指しましょう。</p>

 <p>ま</p> <p>長寿の秘訣は、常に、ご近所さんと交流に努めていくことが大切です。自ら進んで「コミュニケーション力」UPに心掛けましょう。</p>	<p>ま</p> <p>道窓開けて人にも ご挨拶</p>	 <p>み</p> <p>いろいろな人が暮らし合って当たり前のご近所。日頃のお付き合いの中から「声かけて安心しえる地域づくり」を心掛けていきましょう。</p>	<p>み</p> <p>見守りつつで暮らされ</p>
 <p>む</p> <p>相手からの挨拶を待つことなく、こちらからさりげない言葉掛けは微笑ましいものです。まず私が「声かけ」出来るように心掛けましょう。</p>	<p>む</p> <p>向こうより素早く声掛け こちらから</p>	 <p>め</p> <p>優しい目が笑う 人づくり</p>	<p>め</p> <p>昔から「目は、口ほどに物を言う」と、言われています。「ふれあい」は、優しい目から、心から、さあ、実践しましょう「アイコンタクト」。</p>
 <p>も</p> <p>私たちの地域社会には、様々な地域課題があります。その「課題発見」から発想や視点を変えることで、解決につながります。「地域把握」でピンチをチャンス。</p>	<p>も</p> <p>問題点 たくさんあるから チャンスあり</p>	 <p>や</p> <p>振り返り</p>	<p>や</p> <p>やかましい大人の注意で</p>
 <p>ゆ</p> <p>思いやりの行為は、した人も、そして、された人も、お互いに気持ちが良いものです。してよし、されてよし。いつでも、どこでも、誰でも「小さな親切」。</p>	<p>ゆ</p> <p>笑み浮かぶ 譲り合いしてもされても</p>	 <p>よ</p> <p>よ</p>	<p>よ</p> <p>喜びをみんなで分け合う 地域社会</p>
			<p>ご近所の悲しみや喜びを、いつでも、どこでも誰でもが共有できる地域でありたい。こうした、「支え合う地域」を日頃から、地域みんなで心掛けましょう。</p>



ら
創り変え
自慢のまちに
ライフワーク

一人一人が力を合わせ、身近な活動を継続すると、それが自慢のご近所が実現します。地域参加は、私にとっての「**生き甲斐づくり**」。



り
リサイクル
ゴミ出し袋も
気をつかい

安心・安全なまちは、清潔な地域環境から生まれます。「**環境美化**」は、日頃から、正しいゴミの分別を徹底しましょう。



る
地域行事
踊る
地元で
るんるんと

老若男女、誰もが楽しめるお祭りが地域の発展につながります。住民の努力で、これまでの「**地域行事**」を継続して、町おこしに努めましょう。



れ
言葉選び
連絡は
選ぶ相手で

地域には、長寿者や障がい児・者の方々やいろいろなハンデを持つ人がいます。報告・連絡・相談時の言葉や態度はしっかりと**「相手理解」**を心掛けよう。



ろ
知恵を借り
長寿者と呼び
老人を

亀の甲より年の功、長寿者に学ぶことは、いろいろな場面で大変多くあります。「**長寿者の社会参加**」で、地域力の向上に努めましょう。



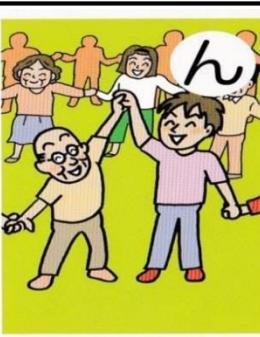
わ
創つてく
未来の地域を
若者が

今こそ、大人社会が若者の地域デビューを大いに呼び掛けましょう。「**若者の居場所**」づくりを目指し、「若者の地域参加」を大いに働きかけていきましょう。



を
かかるた会
福ご近所を
でつなぐ

「**若者発 ご近所福祉かるた**」の読みや絵札を使い、大いにコミュニケーションを深め合いながら「ほっとする地域」を学びあいましょう。



ん
結ぶ縁
ひとつの輪づくり
いたわりで

ご近所さん同士が、普段から、声を掛けあい、ふれ合うことで、地域が大いに盛り上がりります。これこそ**「福祉文化の創造」**です。

第5章

紹介します 各世代・領域の活用事例

第1章から第3章まで、本会の29年間の福祉文化実践活動から、若者が積極的に、地域社会における高齢者を取り巻く、さまざまな生活状況を学び、地域福祉教育教材として「見える化・わかる化」した、「若者発」ご近所福祉かるた」が誕生してから、10年間のプロセスをまとめました。

そして、「ご近所福祉」こそ地域の課題解決の第一歩であることを確認してきました。

これまで、「若者発」ご近所福祉かるた」を配布提供しました、各種団体・福祉施設・地域活動実践者からいただきました、たくさんの「かるた活用レポート」に加え、2024年度赤い羽根助成事業「若者発」ご近所福祉かるたによるご近所福祉検証事業」で取り組みました「若者発」ご近所福祉かるた活用状況調査報告書」から、「家庭・家族」「居場所・サロン」「コミュニティ」「福祉施設」「学校」「福祉団体」「その他：拡大かるた」の各領域別活用項目別して、具体的に27の活用事例を紹介します。

なお、「従来型（かるた取り）活用方法」「グループワーク的活用方法」「課題解決型活用方法」「その他の活用方法：ジャンケンゲーム・絵合わせゲーム・伝承ゲーム」等の活用も加えています。

家族・家庭

高齢者自身の学習

高齢者自身の、これまでのご近所を振り返りながら、かるたの「読み札」を、用意した「ご近所福祉かるたノート」に毎日少しづつ書き綴りながら、これから世代に託したい思いを記録する。

進め方

- *「若者発」ご近所福祉かるた」の誕生の由来等を理解し、「かるた」を保有している、近隣の各種団体・福祉施設・地域実践者等で、貸出の手続き（期間）をし、学習を始める。
- *身近なご近所へのこれまでの関わりを振り返る。
- *用意した「ご近所福祉かるたノート」に、毎日、少しづつ「読み札」を書き取る。
- *書き綴った「読み札」の隣の行に、ご近所の様子やこれからのご近所への思いを書き綴る。
- *書き綴った「ご近所福祉かるたノート」を「日記」として保管して、振り返りをする。

楽しさの工夫

- *ご近所に住んで〇年、ご近所さんと日頃の挨拶や会話などを通じて、どこまでお付き合いが出来ているか、「ご近所福祉かるたノート」に書き留めた内容を振り返りながら、明日へのつなぎをしていくことで張合いが持てる。
- *時々、「若者発」ご近所福祉かるた」の「読み札」を大きな用紙に書き写しながら、生活に変化をもたらせ、生活の中で、継続し励みをもたらせる。

留意点

- *現在の生活で、不安を感じていることはないか、誰に相談することが出来るか、元気なうちに、「ご近所福祉かるたノート」にいっしょに書き留めておくと心強い。
- *生活上の情報が、ご近所から常に届くように、日頃からご近所さんとの会話を心掛けていく。
- *地域行事には、出来る限り参加し、「ご近所福祉かるたノート」に書き留めて、検証していくことも心掛けたい。



家族・家庭 高齢者と孫との向き合い

孫との会話を広げるとともに、「かるた」を活用して、これまでのご近所の様子を具体的に話しながら、これからのご近所同士のつながりの大切さを語る。

進め方

- *孫に、ご近所さんとの関わりを聞いてみる。そして、これまでの高齢者のご近所の出来事を話しながら、ご近所の方との支え合いで、ここまで生活できていることを、実体験をもとに会話を進める。
- *普段の会話の延長線上で「かるた」を紹介し、特に「絵札」から読み取れるものを問い合わせし、関心がもてるよう努める。「絵札」を紹介し、ご近所の現状と、これからのご近所を孫に託す。
- *「かるた」の「読み札」から、「キーワード」を強調する。

楽しさの工夫

- *自由に語れる環境に努め、話題を一つづつ出す。
- *「絵札」から「読み札」を考えてみる。
- *「かるた」から地域診断を試みる。
- *「じゃんけんゲーム」「伝承ゲーム」「組合せゲーム」を組み入れる。



留意点

- *「かるた」誕生の由来を話し、身近な会話に努める。

居場所・サロン 年間計画で定例開催日にプログラム化

支援者中心の運営にならないように、利用者主体のひと時が過ごせるように、年間計画を作成し、運営にあたる支援者は、年間を通じて、「かるた活用日」を明確にし、対等に語れる環境に努めるとともに、利用者の地域環境を、かるたを通じて、支援者が学ぶ機会をもつ。

進め方

- *利用者主体の居場所・サロンの運営に心掛け、年間計画に、定例の居場所・サロン開所日を明確にし開所日の基本的なスケジュールのもとで「かるたで語る」を30分程度組み入れて展開する。
- *一般的なかるた取りをしながら、利用者ご近所を「かるた」の「読み札」をもとに、順番に、利用者ご近所を紹介し、参加者全体に話題を共有する。
- *利用者の参加状況により小グループにして、それぞれ支援者は、各小グループに加わり進行にあたる。

楽しさの工夫

- *「ご近所の出来事」を具体的に、「昨日の私のご近所の出来事」「うれしかったご近所の話」等を支援者が具体的に事例を紹介するとわかりやすい。
- *「かるた」の活用前に、支援者が、事前にご近所にまつわる話題を話しながら、語れる環境に努める。
- *「じゃんけんゲーム」や「組合せゲーム」も導入する。



留意点

- *競争意識を持った「かるた取り」にならないように、事前に展開方法を説明し、安全に留意する。
- *誰もが参加できる展開方法を、支援者相互に確認する。
- *利用者と支援者が対等な関係で、むしろ高齢者等から学び合う、和やかな環境づくりに努める。

居場所・サロン

認知症カフェで「地域」を語る

同じ悩みをもつ方々と、専門領域の支援者等と対等な関係をもちながら、語れる環境づくりを心掛けながら、「誰もが安心して暮らせる地域を語る」楽しいひと時をもつ。

進め方

- *あまり、理論的な活用方法の説明を重視しないで、読み手は、声を大きくはっきり伝わるように心掛け、最後まで「読み札」が読み終わったら、かるた取りをする。
- *参加者の状況により、見学する方々もいて、応援し合う中で、楽しいひと時を過ごす工夫をする。少し、間を取りながら、「読み札」の内容を、応援している皆さんにも、話題を広げていく。
または、支援者自身のご近所を紹介しながら、利用者の明日につなぐ明るさの保有に心掛ける。

楽しさの工夫

- *全てのかるたを使用しないで、地域の環境をある程度理解していくために、あらかじめ、「ご近所あるある、この現状」と題して、当日使用する「かるた」を選別して、ゆっくりと展開をしていく。
- *見学・応援する方々を設けることで、和やかさを広げ試みもできる。

留意点

- *競争心をもたないように、「読み札」の紹介は、ゆっくりはっきりした口調で進める。



居場所・サロン

地域のふれあい交流行事

自治会・町内会、さわやかクラブと子ども会等において、地域行事として、「ふれあい交流の集い」の企画に、「かるた」活用をし、地域を学ぶ・語り合うプログラムとして活用する。

進め方

- *行事や会場の規模により、「かるた」のセット数を事前に用意する。
- *年代、性別、コミュニティ組織役員等を、均等に各グループの組み分けをする。(1グループ8名程度を目安にグループ分け)
- *「かるた」誕生の紹介をし、世代を超えた交流の集いとして、楽しむことを呼び掛け、子どもと大人、役員等の上下関係をもたない雰囲気づくりを心掛ける。
- *「読み手」は、各グループの状況をしながら、「読み札」をゆっくり読みながら、「かるた取り」を楽しむ。その後、「読み札」のキーワードを強調しながら、世代を超えた「ご近所」を語り合う。



楽しさの工夫

- *子どもに向けて、大人たちが「ご近所」の良さや、子どもたちに託したいことを話しかけながら、子どもたちからも、ご近所の出来事が語れる環境に努める。
- *「絵札」を手にした人が、「ご近所で一言」を各グループごとに語つていく場をつくる。



留意点

- *大いに、語り合う雰囲気づくりに努める展開を心掛けて全体を取りまとめていく工夫をする。

居場所・サロン

世代や領域を超えた交流の場

このプログラムは、高齢者対象等、居場所・サロンの利用者を限定しないで、誰でも参加できる場所として、定期的に開所している居場所・サロンにおいて、参加した方々が、自由に「かるた」を活用して、ひと時を過ごす取り組み。そのためには、会場内に、各種教材具があることや、会場内の見える場所におき、お互いに「ご近所」を語れる環境にしていくことからはじまる。

進め方

- * 開所日には、事前に、参加者が目につくように「かるた」や各種教材を並べて置く。また、自由に使用できる環境にしておく。
- * 「かるた」や各種教材について、運営に関わっている方は、参加された人に、積極的に説明し活用を呼びかける。
- 日常的なご近所話から、世代を超えたご近所に話題を広げる。



楽しさの工夫

- * 「かるた」には、「じゃんけんゲーム」や「組合わせゲーム」「昔の遊び」等も楽しめる組み合わせがあることを説明する。
- * 「手づくり遊び」もできる環境にしておく。



留意点

- * 「かるた」を使用した後、所定の位置に戻すことなどは、はじめに周知するか、掲示で表示しておく。
- * 「かるた」は、貸出出来ることを、町内会広報誌等で周知する。



コミュニティ

コミュニティスクール事業

「コミュニティスクール事業（学校運営協議会事業）：保護者や地域のニーズを反映させるために、地域住民が学校運営に参画できるように仕組みや考え方を有する形態の学校」が取り組まれている中で、身近な地域における地域活動の一つである、居場所・サロンにおいて学習する取り組み。

進め方

- * 学校側と事前協議を十分に実施し、その内容を、受け入れる居場所参加者や支援者が理解し、当日を楽しみに待つ働きかけをする。特に、運営スタッフは、「かるた」の誕生由来と、活用方法を把握する。
- * 参加者（児童・居場所参加者・運営関係者等）の参加状況により、事前にグループ分けと「かるた」のセット数の確認をする。（1グループ8名程度内）
- * 当日の展開表に基づき、約40分程度の児童の「福祉体験学習」であること、高齢者とのふれあい交流の場として「かるた」を利用して、高齢者と児童のご近所を自由に語る展開に心掛ける。
- * 「読み札」は、運営スタッフが担当（場合によっては、児童が役割をもつ工夫をする）し、「かるた取り」を、グループ内の運営スタッフが進行し、時々、「読み札」に関する意見交換をする。

楽しさの工夫

- * 「かるた」中心の展開では、ふれあい交流が薄れるので、身近な、具体的なご近所話を高齢者に話していただきながら、児童からも意見が出る語れる環境づくりに心掛ける。



留意点

- * 学校教育との関連性をもった展開を工夫する。
- * 高齢者と児童が交流できるように席を工夫する。

コミュニティ

小地域福祉活動で「地域懇談会」

身近な地域においては、行政や福祉団体から、動員型研修会がよく開催される。毎回、地域の役員中心の参加では、一般住民には、なかなか研修内容が伝わってこない。ここでは、住民主体の研修会として、参加型研修会（集まる研修会）における取組を考える。

進め方

- *事前に、「地域懇談会」の開催趣旨（公助・共助・自助を学ぶ）を研修対象管内の住民の皆さんに呼びかける工夫をする。日頃、地域活動に精力的に取り組まれている民生委員児童委員や自治会・町内会経験者、さわやかクラブ、子ども会世話人等の協力の呼掛けに努める。
- *「地域懇談会」は、概ね2時間以内でまとめ、終了時間を明確にして展開する。
- *「住民と行政の協働関係」、「地域力」等を全体の展開において方向づける。
- *ご近所問題を、具体的な事例として提示をする。
例えば、「このご近所で、すーと暮らしたい高齢者世帯の事例を考える」と見える化した「シート」を提示しながら、数名ずつのグループごとに意見を出し合い「シート」に意見をまとめていく。
- *ここで、あらかじめ協議をしたグループの話し合いに「かるた」の中から、高齢者に関わる内容の「かるた」を取り出して、ご近所の現状とこれからへの期待をグループで、「共助」の範囲で出来る取り組みを話し合う。
- *グループの進行は、開催に当たり賛同した方が、事前の協議に基づき担当をしていく。

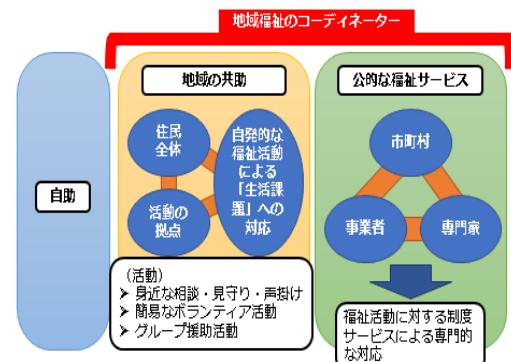
楽しさの工夫

- *グループの話し合いが、世代を超えた意見交換となるように、年代・男女別等を考慮していく。
また、「高齢者を取り巻く課題解決」を掲げている「テーマ」であるので、高齢者への配慮にも心掛ける。
- *「かるた」の導入に当たっては、基本説明の後、「アイスブレーク（語れる環境づくり）」の一コマを導入することで、後の進行が和やかさを増すことが期待出来る。
- *「かるた」活用と同時に、パワーポイントに「かるた」の「読み札」「絵札」を画像化し、「見える化」を工夫する。

留意点

- *現実の地域社会の中で、結論を出すことなく、新たな地域づくりに向けた、建設的な意見交換が出来る工夫をする。
- *管内の家族の参加、取り分け、若者層の参加を積極的に呼び掛けていく。

▶ 住民と行政の協働による新しい福祉



▶ 生活圏域の「小地域の機能」とは？

問題解決機能

住民福祉教育機能

ご近所の支え合い機能

専門性と市民性を「融合」する機能

お互いに「共有」する機能（ソーシャル力）

福祉ニーズを抱える高齢者世帯への支援（○印）	
(1) 問題は何か	
(2) 必要な援助は何か	
(3) 私たちでできること	



コミュニティ

ご近所のお友だちとおしゃべり会

それぞれの家を訪問することが、なかなかできない社会となった今日、気の合うご近所の高齢者同士が、自治会や町内会が維持管理をしている「自治会館」「地区センター」「地区老人憩いの家」「町内会集会所」「町内会公会堂」等地域資源を有効に利用して、楽しいおしゃべりのひと時をもつ。

進め方

*気軽に声を掛けられるご近所さん同士が、気兼ねなく活用できる自治会や町内会が維持管理をしている「自治会館」「地区センター」「地区老人憩いの家」「町内会集会所」「町内会公会堂」において、使用時間内で、気の合うご近所さんが主体的に、本音で語り合い、ひと時を過ごす居場所で、ご近所を語り合う時に、「かるた」を有効に活用する。自然に集まった仲間と、ある時には、お弁当持参で、ゆったりとしたご近所を語れる環境に努める。

楽しさの工夫

*ご近所との関係を維持し、積極的に地域行事などに参加し、世代を超えた関係づくりに努め、居場所で自由に交流することを働きかける。



留意点

*建物の管理責任者には、使用日時、時間帯等を予め届けをだして、安全を確認する。
*予め「かるた」の借用について、問い合わせをする。

コミュニティ

地域の福祉啓発用立看板に活用

地域が抱えている問題を「かるた」の「読み札」と「絵札」を組み合わせて、管内に「立て看板」にして、地域住民に、ご近所福祉を「見える化」「わかる化」して、啓発活動に努める。

進め方

*研修会に参加した折に、「“若者発”ご近所福祉かるた」の存在を知った地域住民が、コミュニティ運営に関わる役員に、研修会の内容を話している中で、役員から、ご近所の支え合いを地域住民に理解してほしいと課題を話された。時々は、回観板等で周知はしているものの、目に見えた動きがない。
*毎月開催する役員会は、ほぼ、行政や各種団体からの周知事項を確認する程度に留まっている。こうした機会に、地域が抱えている問題を「見える化」「わかる化」する目的で、管内に「広報啓発用立て看板」設置を話し合う。予算の捻出、関係方面への了解をもとに、「かるた」の内容を検討し、設置場所の具体化を進める。

楽しさの工夫

*地域の課題解決は、役員だけではなく、広く住民にも、地域課題に関心を持つ呼び掛けと、コミュニティ活動に積極的に参画できる環境づくりに努める。
*こうした取り組みは、今後、若者にも、コミュニティ活動に関心をもってもらうために、「啓発ポスターの制作」や「標語」を学校にも呼びかけて、児童・生徒の参加等地域ぐるみの活動に広げていく。

留意点

*「かるた」の引用は、本会に連絡して確認を取る。



コミュニティ

地域活動の記念誌等に掲載

これまでの地域活動の記録や記念誌等を発行して、更に、地域住民に、理解と協力を呼び掛ける時に、地域活動やご近所の支え合いを出来る限り、わかりやすく編集していく取り組み。

進め方

*熱い思いで、長年地域活動に取り組んできた役員が、これから地域づくりに期待をかけて、これまでの地域づくりを記録にまとめたり、活動の節目を記念誌として発行するに当たり、コミュニティ組織内で、前年度に企画提案をし、資料収集作業に取り組む中で「ご近所の支え合い」の重要性を議論し、「かるた」の存在と活用の承認をもとに次年度につなぐ。

*当年度において、改めて、役員会において、「編集委員会」を設置し、発行時期等を確認し、本格的な作業に入る。編集委員による議論を重ね、「仕様」に基くレイアウトの検討とともに、「かるた」の誕生、そして、若者の地域参加の意義を理解し、編集の柱立てに合わせて「かるた」の選択作業を編集委員が話し合い、学び合う場を設けながら、編集作業を具体化する。

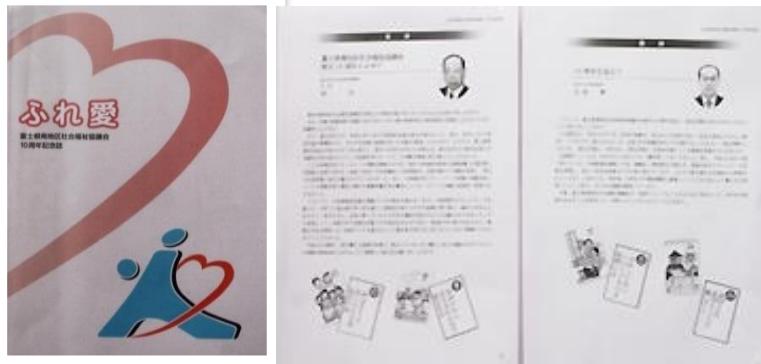
*記念誌等の内容に硬さのあるページを読みやすくするため、空間的な「かるた」の配置を試みる。

楽しさの工夫

*掲載する「かるた」を選ぶ作業にの過程で、「私たちの地域のご近所福祉」を学び合う場として「かるた」を活用し、相互理解に努める。

留意点

*「読み札」と「絵札」を組み合わせる。
*「かるた」引用は、本会の確認を取る。



コミュニティ 地区ふれあい祭りのコーナー企画として

コミュニティ組織の年間計画に基づき開催する「地区ふれあい祭り」において、楽しく世代を超えて、ふれあい交流をしながら、「福祉を学ぶ」コーナーとして取り組む。

進め方

*企画担当者は、開催趣旨に基づき、児童から高齢者までが参加できる展開方法を事前に協議をする。
*「みんな集まれ！」 ホッとするご近所さんを「かるた」で学ぼう（仮称）等、楽しいコーナーを呼び込む「キャッチコピー」を会場に表示をして、参加の呼びかけを工夫する。
*参加者に、簡単な「私のご近所チェックリスト」を配布して、「ご近所さん」をチェックする。
*会場に、ある程度集まった参加者を、グループ分け(4~5名を基準)をして、コーナー企画担当者が読み手となり、事前に選択した「読み札」をはっきり、ゆっくりと読む。参加者は、2人1組となり、交互に、「絵札」を取る役割を持つ。「絵札」を取ったペアは、自分のご近所を紹介する。
*こうした取り組みを繰り返しながら、用意した「読み札」が終わったところで(ある程度時間設定)、配布した「私のご近所チェックリスト」に、かるた取り後の感想を記入する。

楽しさの工夫

*「私のご近所チェックリスト」項目と、選択した「かるたの読み札」は共有できるようにして、最後に「自己採点」して満足度を高める。

留意点

*地域性を考えながら、開催地域の状況に応じた「私のご近所チェックリスト」を作成する。
*行事全体の進行に応じた、コーナーの展開をする。



コミュニティ

高齢者の集いの行事で

あるコミュニティ組織の近隣の高齢者が、コミュニティ組織の理解をいただき、公会堂や地区センターを使用して、参加者同士で計画を立て、定期的に集会を開き、学びや親睦を図る活動に「かるた」を取り入れて地域参加を考える機会をつくる。

進め方

- *コミュニティ組織の近隣で、地域参加を望んでいる高齢者同士が、学びと親睦を図る目的で、定期的に集会を開くに当たり、賛同した高齢者の意見を取りまとめて、大まかな年間計画をつくる。
- コミュニティ組織管内で活動している方をゲストに迎えた講話を聞く延線上で、最寄りの福祉団体等の協力をいただきながら、「かるた」を活用して、高齢者の地域参加や、高齢者とご近所福祉を学ぶ機会をつくる。
- *高齢者同士が、いくつかのグループに分かれて、各グループごとに、自由に意見を述べ合いながら、これから高齢者の地域参加やご近所との関わりなどを集会の時間内で活用する。
- *あまり、硬い雰囲気にならないように、普段の会話の延線上で雑談できる環境をつくる。

楽しさの工夫

- *集会の中で、世話人が、今日のご近所の出来事を話しながら、気軽な話題提供から「かるた」を紹介する。
- *もし、管内の若者に、集会参加の呼掛けが出来れば声を掛けてみる。

留意点

- *出来るだけ、参加者が自由に語れる環境を維持しながら、「かるた」の活用を導入する。
- *グループ分けは、相性も配慮する。



コミュニティ

相談支援研修においてご近所を学ぶ

支援者の問題解決のための研修会で、障がい者ご本人やそのご家族が、ともに地域で暮らし合うための「地域診断」を、それぞれの立場から検証する補助教材として「かるた」を活用する。

進め方

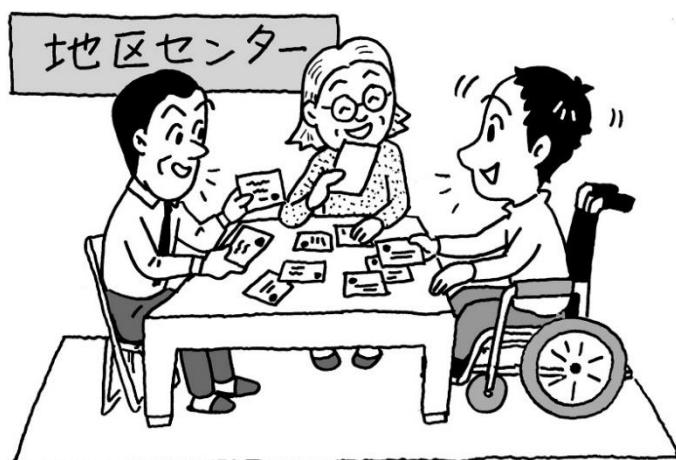
- *参加した方々のご近所を相互理解することを目的で「かるた」を活用することを共有し、決して、支援者主体の「かるた」の活用に偏らないようにする。
- *開会後、自己紹介等「アイスブレーク」のプログラムを組み入れて、語れる環境に心掛ける工夫をする。
- *研修テーマに沿って、あらかじめ「かるた」を選択し、その範囲内で、かるた取りしながら、「読み札」ごとに、そこから浮き彫りになった現状とこれからに期待したい地域環境の意見を出し合う。

楽しさの工夫

- *「かるた」のキーワードを確認しながら、支援のあり方をお互いに考える。

留意点

- *参加者がそれぞれの立場で、意見を述べることが出来るように工夫する。



福祉施設（児童）放課後児童クラブで“ご近所”を話し合う

2021年度に、静岡県内の小学生4年生から6年生対象に、「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました調査」に取り組んだ。子どもたちを取り巻く家族・家庭環境が、今日、大きく変化する中で、子どもたちから、コミュニケーションの大切さ、認め合い、ほめることで自発性の伸ばす、子どもたちに歩み寄る大人社会等、数々の提言をいただいた。

日頃の子どもたちとの関わりの中で、「かるた」を活用して、家庭や家族、ご近所の話題、自由に語り合う機会をつくる。

進め方

- *「かるた」の誕生の由来を語り合いながら、子どもたちの身近なご近所や家庭での生活について、自由に意見を出し合いながら、「かるた」から、より具体的に家庭や・家族、地域(ご近所)を、参加した子どもたちで意見を出し合う場をつくる。
- *支援者が読み手として「読み札」読むことから始め、和やかな雰囲気が読み取れたら、子どもに「読み手の役割を呼び掛けていく。
- *支援者は、側面的に、その都度、自らの地域の出来事を関連して話題を提供し、子ども同士のコミュニケーションの輪の広がりを期待する。

楽しさの工夫

- *支援者は、子ども同士のつながりが広がるように、積極的に体験談を話しかける。
- *「じゃんけんゲーム」「絵合わせゲーム」等を組み入れる。

留意点

- *「かるた取り」として、競い合う場を極力避けて、安全面に留意する。
- *消極的な子どもに配慮をする。



福祉施設（児童） 児童館で子どもたちが集う中で

本会では、「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました調査」(2021年度)「私にとって“ご近所”とは 中学生(351名回答)の意識と実態調査」(2023年度)に取り組んできた。児童・生徒の回答から、家族・家庭や、地域社会(ご近所)を取り巻く問題提起してきた。もっと、子どもたちに向き合い、歩み寄る大人社会の努力とともに、日常的に、児童館を利用する子どもたちに、「かるた」を活用して、家族・家庭や地域(ご近所)への思いを語り合う。

進め方

- *児童館等を利用する子どもたちに、「かるた」の存在を示しながら、子どもたち同士が自由に、「かるた」を楽しめるように方向づけをする。
- *「かるた」の概要を掲示し、「見える化」の工夫をして、自由に活用できる環境を心掛ける。

楽しさの工夫

- *児童館等の周辺の地域の良さを紹介する。
コーナーの工夫。

留意点

- *「かるた」を自由に活用できる保管場所の確保。
- *異年齢集団で楽しめる環境をつくる。



福祉施設（高齢者） テイサービスセンターで和やかに

「テイサービスセンター」において、年間及び月間・週間・一日の日課表に基づき、「かるた」の活用を工夫する。日々の日課では、利用者の状況をみながら、多目的な支援活動の一つとして、少人数で「かるた取り」をする。支援者は、利用者がより多く参加し、語れる環境づくりに努める。

利用者同士のふれあいのひと時を過ごし、支援者は、利用者が語るご近所の様子などを理解し、引き続き、これからの利用者と地域とのつながりが維持できるように、日々の支援に活かす。

進め方

- *事前に、福祉施設内の打ち合わせ会等で、「かるた」の誕生の経緯や「ご近所福祉」等について共通理解をし、継続的な活用につなげる工夫をする。
- *「かるた」活用においては、その都度、活用の目的を、相互に支援者は理解し、「かるた」の導入を心掛ける。
 - ◇例えば、「施設利用者が自由に語れる環境に心掛ける」「支援者が、利用者を取り巻く家庭・地域環境を理解する」「利用者の個別支援に活かす」「みんなで、ご近所福祉を考える」等を確認し合う。
- *ここでは、競争心を意識しない「かるた」の活用事例を紹介する。
 - ◇支援者は、利用者の最近のご近所や家族との関わりについて、自ら、最近の明るい話題を提供しながら、「かるた」の活用につなげる。
 - ◇予め、「かるた」を選別しておき、ほほえましい光景が描かれている「絵札」を示しながら、どんな光景かを問い合わせてみる。
 - ◇「絵札」を「読み札」の内容に近づけながら、利用者からの意見を期待する。
 - ◇利用者から意見が出そろったところで「読み札」を読み上げて、「絵札」の内容を共有する。
 - ◇紹介した「絵札」を並べて、「これまでのご近所」をみんなで振り返るとともに、これからのご近所に期待をする。

▶ 地域課題改善・解決にトライ!



楽しさの工夫

- *支援者は、利用者が出来るだけ多く、自由に参加する環境に努め、和やかさの中に、自ら参加しようとする利用者には、さりげない誘いをしていく。
- *「かるた」に合わせて、「故郷」「隣組」などを選曲し、みんなで歌いながら進行する。
- *次の展開に向けて、当日の状況を支援者が振り返り、次につなげていく。

留意点

- *「かるた」の存在を、誰もが福祉施設において把握し、それぞれの計画に位置づけを心掛けて、継続的な「かるた」の活用が出来るようにする。
- *自由な参加を基本にし、利用者同士で会話が弾んでいくように、支援者相互に工夫をする。



福祉施設（共通）

施設内職員研修会

日頃は、福祉施設における利用者の自立支援を中心に、さまざまなケース検討会議等が取り組まれている中で、「施設の社会化」をもとに、利用者を取り巻く「地域（ご近所）」を話し合いながら、併せて、支援者のご近所福祉を振り返り検証する機会をもつ。

進め方

*誰もが安心して暮らせる地域づくりをもとに「福祉施設の果たす役割」として、いかにして「施設の社会化」(①機能の社会化 ②運営の社会化 ③問題の社会化 ④処遇の社会化)に向けた取り組みをするか、利用者を取り巻く地域環境をテーマにした研修に「かるた」を活用する。

*支援者自身のご近所を語り合いながら、施設を利用されている、利用者を取り巻く地域環境について「かるた」で、現状と課題を話し合う。

楽しさの工夫

*ここでは、理想の地域を描くことではなく身近な地域で、日頃、利用者に向き合っている支援者自身の私であるかを検証する。

留意点

*課題の「かるた」の選別を検討する。

私は一体...



施設の4つの社会化

1. 機能の社会化
2. 運営の社会化
3. 問題の社会化
4. 処遇の社会化

ご近所かるたを

使って
①～
②～
③～



福祉施設（共通）

福祉教育体験学習

各福祉施設においては、年間を通じて、地域や学校、各種団体、企業等からの要請を受けて、さまざまな形で「福祉体験学習」の受け入れをする機会が多い。各福祉施設内の概要を説明し、施設見学とともに、それぞれの種別による福祉ニーズを実体験（車いす体験、障がい者や高齢者とのふれあい体験等）に加えて、施設利用者も地域の一員として、「かるた」を活用して、「地域と福祉施設をつなぐ」問題提起をするプログラムとして位置付ける。

進め方

*理論と実践を学ぶ中で、「施設の果たしている役割」を理解し合う。
*それぞれの参加者の地域の現状認識を「かるた」の活用により浮き彫りにする。
*施設利用者が地域で暮らし合うことが出来る地域を考える。そこで、「施設」の役割を理解する。
*地域参加活動を問い合わせる。（左図中学生調査結果参考）

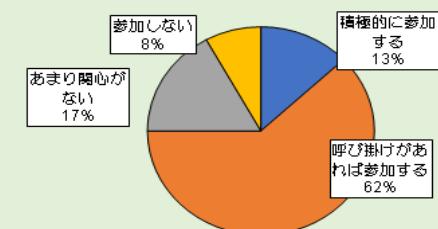
楽しさの工夫

*小グループの「グループ討議」の導入工夫。

留意点

*「かるた」の活用については、広く、地域や学校等からの要請があれば、貸出出来ることを説明する。（「拡大かるたの活用」も同様）

「地域活動」の参加協力の呼び掛けがあった時は参加しますか？



福祉施設（障害者） ボランティアと利用者で地域を語る

定期的にボランティアとして、障がい者施設を訪問される皆さんと、施設利用者と、和やかにふれあい交流の時間帯を設けて、それぞれの立場で「ご近所」を語り合う場に「かるた」を活用する。

進め方

- * 予め、「ボランティアと利用者と地域を語る」をテーマにした計画を、施設側は明らかにしておく。
- * ボランティアに対する研修の機会とともに、利用者や施設側は、地域と施設をつなぐ、相互理解の研修の場として位置づけていく。
- * 和やかな語れる環境づくりに心掛けながら、「かるた取り」を展開し、「読み札」ごとに「ご近所福祉」をそれぞれの立場で意見を述べる。

1. お互いを認め合う
2. 対等である 上下をつくらない
3. 見返りを求めない
4. 繼続的である
5. 無理がない

ご近所福祉 = おすそ分け

楽しさの工夫

- * 進行役の支援者は、ボランティアの意見を求めながら、利用者がご近所を語れる環境を工夫する。

留意点

- * 事前に、施設内で「かるた」の紹介を掲示し、当日の楽しみを期待する。
- * 「絵札」からの話題提供も工夫する。



学校（小学校） 地域を学ぶ学習（福祉講話）

地域活動に熱心に取り組まれている方や、障害者の方、高齢者の方などが、学校教育の中で、講師として「福祉講話」の機会がある。こうした、外部講師の講話とともに、児童相互に、「地域を語る」組み合わせで「かるた」を活用する。

進め方

- * 予め、講師と事前協議をしたうえで、「かるた」の導入方法を確認する。
- * 「地域には、いろいろな人がいて当たり前」「ご近所の支え合い」の大切さについて、グループごとに「かるた」を活用して、意見交換をする。
- * 「読み手」を講師に依頼したり、児童や、教師が担当するなど変化をもたせる。
- * 何枚かの「読み札」をもとに、意見を交わし合った後に、講師の講話につなげる。

楽しさの工夫

- * 最近のご近所の出来事を紹介し合う。
- * 児童がそれぞれの立場で、意見を述べることが出来る環境に努める。

留意点

- * 講師により、事前に「かるた」を選別することを検討する。

» 地域は、いろんな人が住んで当たり前



学校（専門学校）

地域福祉の講義の中で

「地域福祉」の授業において、「理論と実践」「専門性と市民性」「教育と福祉」をいかに「融合」していくかを、「かるた」を活用して、グループワークにより、議論を深め合う。

進め方

- * 同世代の若者が、高齢者から学びあい「かるた」が誕生した経緯を導入部分として説明する。
- * 学生を取り巻く地域環境について意見を紹介し合う。
- * 「融合の持つ意味」「小地域の機能」を課題しながら「自立支援」をもとに、「かるた」の活用をする。
- * 福祉の担い手に求められる要素を問い合わせる。

楽しさの工夫

- * 「絵札」をもとに、「ご近所福祉」を問い合わせ展開も工夫していく。
- * 学生相互に、新たな「ご近所福祉かるた」の創作を呼び掛ける。

留意点

- * 結論だけを求めることがなく、グループの学生一人一人が意見を出せる環境に努める。

生活圏域における小地域の機能



融合のもつ意味



障害者団体

定例会で“ご近所”を語り合う

ボランティアと障がい者が会員として活動している、障害者団体の定例会において、支援を中心とした協議の場に、地域で暮らし合うための「ご近所福祉」を相互理解する学びの場に「かるた」を活用、これからの支援活動に活かす場をつくる。

進め方

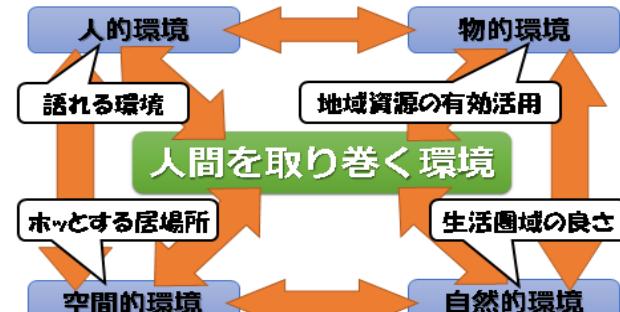
- * 「かるた」の誕生経緯を確認し合いながら、若者の地域参加の現状を検証し、積極的な若者の地域参加について意見を交わす。
- * 障がい者の地域での生活の現状を理解し合う。
- * 「かるた」の活用については、障がい者の状況に応じた、活用の工夫を検証し合う。
- * 「かるた」の「読み札」[キーワード]から、それぞれの障がい者の日常生活に置き換えてご近所のささえあいを学び合う。

楽しさの工夫

- * それぞれの障がい者から、ご近所からの支援で、心強さを感じた出来事を紹介していただく。

留意点

- * 日常生活における、地域住民の「ご近所福祉」を検証し合う。



さわやかクラブ 毎月発行の会員向け「通信」に紹介

定期的に会員用に発行する「さわやかクラブ通信」に、シリーズで、「かるた」の「読み札」と「絵札」を紹介し、会員向けに、「ご近所福祉」への関心とともに、積極的な地域参加を呼び掛ける。

進め方

- *まずは、組織の中の「編集委員会」「通信担当者」等で、「かるた」の誕生の趣旨をお互いに理解し、広く会員に、会の運営方針に基づく、広報啓発を目的に、掲載をすることを確認する。
- *通信の発行目的に沿って、「かるた」をシリーズで掲載できるようにする。
- *会員内で、「かるた」の「キーワード」に関連した出来事や、紹介できる事例があれば、関連内容として紹介すると身近な学びにつながる。

楽しさの工夫

- *通信の新たな掲載企画として「〇〇地区のご近所福祉」(仮称)を設けて、会員個人からの投書とか、地域の活動等の取り組みを具体的に掲載し、間接的な会活動への参加を呼びかけてみる。
- *会員相互に「かるた」を活用した活動内容を通信に掲載し、管内のコミュニティ組織や学校教育等に配布をする。
- *管内の子どもや大人への啓発にも努める。

留意点

- *「かるた」に関する問い合わせは、さわやかクラブで対応できる範囲は積極的に対応し、詳細については、「静岡福祉文化を考える会」を紹介する。



さわやかクラブ 毎月の定例会でご近所を語り合う

年間計画に、「ご近所を語る」をテーマに、会員相互のご近所を小グループで意見交換をする定例会に「かるた」を活用して、ご近所が抱える問題に、会員がどのように関わられるかを話し合う。

進め方

- *会員の出席状況により、いくつかの小グループに分かれて、話し合いの準備をする。
- *話し合いに入る前に、地域を取り巻く様々な課題を学んだ若者が取りまとめた内容を「かるた」誕生につなげたプロセスを説明する。
- 会員が、若者や子どもと向き合って話す機会をつくり、積極的に、ご近所の支え合いを語る。
- *当日の「かるた」の活用方法について、競争心をあおるかるた取りではなく、「読み札」にまつわる、話題を会員同士が共有することを周知する。
- *「読み札」ごとに「キーワード」をもとに グループ内で自由に意見を出し合う。
- *時間内に出た内容を、グループごとに発表し、これからのご近所との関わりを確認する。

楽しさの工夫

- *ゆっくりと、会員同士が自由に意見を交わしながら進行する工夫をする。

留意点

- *語れる環境づくりに努め、和やかなグループ分けを心掛ける。
- *安全面に留意する。



民生委員児童委員

高齢者の支援を考える研修会

各民生委員児童委員が関わっている福祉ニーズへの対応について、講師を迎えた研修会ではなく、地区民協定例会や部会等で、それぞれの民生委員児童委員の経験や自由な提案意見を出し合いながら、語れる環境の中で、「かるた」を導入して、和やかな学びの場を持つ。

進め方

- *「ワークショップ」による研修について、お互いに共通理解をするとともに、若者が、高齢者から学び「かるた」が誕生した経緯を、始まる前に理解する。
- *「高齢者を取り巻く福祉課題」をテーマとした展開をするに当たり、該当する「かるた」を選択する。
- *進行役のもとで、具体的な議論をする前に、「アイスブレーク」(語れる環境をつくる)として「かるた」を活用する。「かるた」から読み取れる地域の現状とこれからを自由に意見交換をする。「共助」について「支え合う環境」を確認する。
- *コミュニティの形成について「地縁組織」と「志縁組織」を確認し合う。さらに「かるた」の活用で、「自助」「共助」「公助」を確認する。その後、「テーマ」に基づき、「社会資源の有効活用」等をもとに議論を深める。

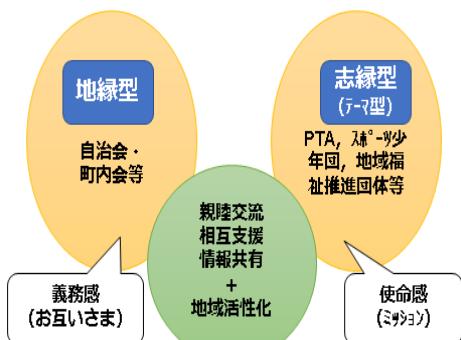
楽しさの工夫

- *「かるた」活用の時は、それぞれ各民生委員児童委員の地域をもとに意見を述べて、話し合いが参加者全体に共有できるようにし、同様な意見をもっている方がさらに意見を出し合う「語れる環境」に努める。

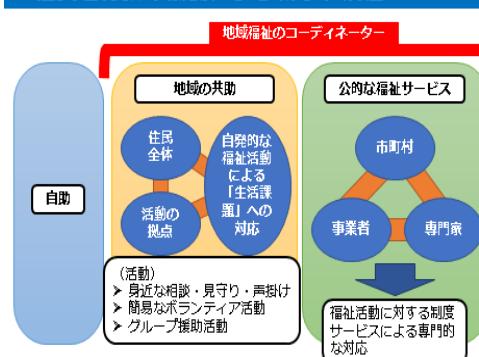
留意点

- *本題に入る前の「アイスブレーク」としての「かるた」の活用であることを確認する。

▶ 地縁型と志縁型



▶ 住民と行政の協働による新しい福祉



〇〇地区民生委員児童委員研修会



拡大かるたの活用 参加者や催物の内容により工夫

本会では、「“若者発”ご近所福祉かるた」の誕生後、配布提供した各種団体・福祉施設・地域実践者等から、広い会場で、集団で活用できるかるた、高齢者にとって、もう少し大きなかかるたの要望があった。「鈴与マッチングギフト助成事業」により、各種行事(イベント)や、高齢者が多く参加する行事に「見える化」「わかる化」を目的に「絵札を拡大したかるた」を制作し、貸し出しをしている。ここでは、これまでの活用事例を紹介する。

■拡大かるたに関する問い合わせは、

〒425-0041 焼津市石津三丁目10-8 静岡福祉文化を考える会 平田 厚
TEL & FAX: 054-624-1924 携帯 090-4861-4547 Email : monoausa-tomv@theia.ocn.ne.jp

進め方

(活用事例)

(1) 県主催「健康福祉フェア」における活用

割り当てられた会場を最大限活用しながら、拡大かるたの周りを高齢者等が椅子に座り、「読み札」の「絵札」の方向に、「指示棒」を示す。「指示棒」以外に、「お手玉」を参加者に配り、「絵札」の上に乗るようにするやり方も工夫できる。



(2) 市町主催「ふれあい広場」における活用

拡大かるたの周りに参加した子どもたちが位置して、「読み札」を最後まで聞き取った後に、「絵札」を探す。2人組で交互にかるた取りに参加し、一人は、応援にまわる。



(3) 県域の「コミュニティを学ぶ研修会」で活用

講義に入る前の「アイスブレーク」として。それぞれの「拡大かるた」を1枚づつ手にして、自己紹介の中に、「絵札」から読み取れるそれぞれの参加者のご近所を紹介する。それに対して、そのほかの参加者からも、同様なご近所を紹介し合う。



(4) 市部における「居場所研修会」で活用

「今、なぜ居場所か」をテーマに、真の居場所は家庭家族機能の中にあることを共有しながら、「地域を家庭化していく」小地域活動の取り組みとして「居場所」を考える。身近なご近所を考える課題提起として「拡大かるた」を紹介する。



楽しさの工夫

*音楽を流し、和やかな会場の工夫をする。

*グループ分けをしたり、代表者にかるた取りを託し、他の参加者は応援にまわるなど、役割分担を交代しながら、連帯性・協働性などを目標に展開を工夫していく。

留意点

*参加者の状況をしっかりと把握し、動きを伴う展開においては、競争意識が出ないように、特に安全面に配慮する。

*会場の規模により、「読み札」が聞き取れるように、前もって、音響設備を準備をし、誰もが聞き取れるように配慮する。

第6章 「“若者発”ご近所福祉かるた」でつながる地域 ◇引き続き「活用状況レポート」をお寄せください。

令和 年 月 日提出

「“若者発” ご近所福祉かるた」活用状況レポート

1. 活用団体・グループ・個人

*住所 〒 — 市 町

fax — — fax — —

E-MAIL:

*施設・団体・グループ名

*代表者（責任者）・個人

*担当者名

2. どのような領域で、どのような時に活用されましたか。（活用目的）

3. どのような展開をされましたか。（活用方法）

4. 参加者層 名程度

(1) 年代 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70以上

(2) 性別 [男性 名程度] [女性 名程度]

(3) 領域 幼児 小学生 中学生 高校生 大学生 有職者 年金生活者 その他

5. 活用時間（30分以内 30分～60分 60分以上）

6. 活用上の留意点（工夫）

7. 参加者の反響

8. 活用所見

■ぜひ、「若者発 ご近所福祉かるた」活用後は、この「活用状況レポート」を使用して、郵送か、fax (054-624-1924)、E-MAIL monogusa-tomy@theia.ocn.ne.jp または右の「QRコード」にて、下記に、ご意見をお寄せ下さい。 いただきましたご意見は更に、「福祉文化実践活動」に活かしてまいります。 よろしくお願いします。
〒425-0041 焼津市石津三丁目 10 番地の8 静岡福祉文化を考える会 平田 厚宛



中学生の意識と実態調査結果から大人社会への提言

「静岡福祉文化を考える会」は、この29年間「静岡発 福祉文化の創造」を目指した実践活動の大きな柱立ての一つに、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題をテーマに、「調査研究活動」に取り組んできました。

令和5年度は、「焼津福祉文化共創研究会」との協働により「共創社会実現研究会」を設置（10回開催）して、今回、初めて、中学生対象調査を実施しました。中学生の地域参加を大いに期待しながらも、地域コミュニティの希薄化、家庭・家族機能やご近所福祉（支え合い）の多様化とともに、その基盤が不透明化、加えて厳しいコロナ禍下にあり、若者との日常的な交流環境には至ってません。地域社会に明るい兆しが見えてきた時期に、これから地域づくりに向けて、地域社会に関心を抱き、近い将来地域の担い手を期待し、中学生を対象に、身近な地域に対する意識と実態を把握し、若者の地域参加の必要性を呼びかけるとともに、世代間交流できるこれからの地域づくりに向けて、大人社会に提言する目的で「私にとって“ご近所”とは 中学生の意識と実態調査」を実施しました。2023年08月05日～2023年09月30日を期間として、静岡県内の中学生（1～3年生）を対象に6項目、35の設問を投げかけ、351名から回答をいただきました。

調査結果から、浮きぼりになりました「大人社会への15の提言」を紹介します。

これから「若者発 ご近所福祉かるた」の活用に、参考にして下さい。



県内351名の中学生から大人社会への15の提言

- (1) 文化・芸術・スポーツ等、多彩な趣味・特技を持つ中学生が多いことがわかった。
自分の持ち味(趣味・特技)を地域活動の場で活かしてみたい、参加したい意向の回答は53%。
中学生の自己表現が出来る、身近な地域環境づくりに向けて、地域参加の糸口(きっかけ)をつくる機会を、常に、コミュニティ組織運営において心掛けたい。
- (2) いまの生活環境に満足をしている中学生(86%)であり、ホットとする居場所(家庭・自分の部屋)も心得ている。成長とともに、家庭・家族環境の次に、友人といいる場所の回答が多くみられる。
そして、家族と楽しく生活している環境の回答の中でも、8割の中学生は悩みごとがある回答(学校の勉強のこと、将来のこと、進学のこと等)から、家庭環境は、日頃から、語れる環境を心掛けたい。
- (3) 抱えている悩みを相談できる相手は、家族から友人へと大きく変化をしている。その中で、父親の存在が見え隠れしている。「語れる環境」づくりは、まずは家庭・家族からを心掛けていきたい。
特に、男性の社会性や、コミュニケーション力を養う、日頃の心掛けに努めたい。
- (4) 友人に相談する、友人といいる場所が居場所である回答から、今の中学生は、友人関係は幅が広く、お互いに話せる環境を維持していると受け止められる。大人社会は、「語れる環境」に心掛けて、中学生が、地域社会を見る目を養うことが出来る工夫が求められる。
- (5) 社会の大きな変化の中で、大人社会は、共働きの社会となっている。
こうした、大人社会を取り巻く家庭環境にあって、「家事労働(手伝い)」の位置づけは、小学生と比較すれば、減少はしているものの、その役割分担をしっかりと認識している回答である。
本来、家庭機能として「産み育てる環境」「保護的機能」「福祉的機能」「教育的機能」「経済的機能」「情緒安定機能」の6つの柱立てがあるといわれているが、今後、こうした機能は大きく変化することが予測される中で、家事労働の位置づけは、日常生活の中で、自然に位置づけ、社会性や連帯性を育む家庭環境を維持したい。
- (6) コミュニティ組織運営の認識や理解は、今日、大人社会においては、大きな課題にもなっている。(自治会・町内会加入減少) 地域社会における、身近な地縁組織の所属意識を中学生に求めても、「知らない」回答が大半(73%)である。日頃から、近隣社会の共助のあり方について、大人社会から、まず、意識を高め、中学生を地域社会につなげる工夫をしていきたい。
- (7) 誰もが、安心して暮らせる地域であると回答した中学生が約7割、まだまだお互いに努力をしていく必要がある回答が3割。こうした回答を踏まえて、中学生が心掛けていることの一つに、「自分か

ら進んであいさつをする」回答が約3割ある。

難しい取り組みではない、普段の生活の中で取り組める行動である。

他人のために、出来ることはやるという意思表示の回答が約7割あることを踏まえて、大人社会は、中学生に、積極的に地域とつながりが出来るように、その出番を提供していく工夫をしていきたい。

- (8) 時間的制約のある中学生でも5割は、地域の行事等に参加をしている回答である。

参加していない中学生からは、時間が無い回答は多いものの、参加のきっかけがない、情報が届いていない、参加の仲間がいれば参加すると、自分に合った、楽しい行事を期待する回答に、中学生の地域参加の期待もできる。

地域行事等への参加の動向は、出来る限り参加したい81%の回答結果から、中学生の持ち味が發揮でき、大人社会だけの企画運営から、中学生等、若年層の意見を積極的に取り入れてほしいと要望する意見を組み入れた場合に、地域社会への関心は高まり、それぞれの領域の負担が軽減され、地域の活性化に一步前進する予測もできる。

こうした提案を実現していく上で、「トータルコーディネート機能」を、誰が担うかの課題がある。

- (9) 住みよい地域である回答が91%あった。大人社会にとって、大いに救われる回答結果である。

福祉の視点からは、「ご近所づきあいが良い」の回答も多い。

引き続き、大人社会が、住みよい地域に向けて、大いに努力していく領域である。

- (10) 今や、情報の多様化、複雑化等が進んでいる中で、中学生は、身近な地域の情報入手は、「家族」が一番多い回答であった。この意味から、まず、大人社会が、積極的に地域に関わり、地域の動きを知り、常に地域の情報を細かく、わかりやすく、中学生に、日頃の家庭生活の中で話す環境をつくることが求められている。

IT時代の中で、意外と、中学生は、小学生よりも「回覧板」からの情報入手を心得ている。

身近な地域社会では、これまで長い間、今まで、回覧板の機能を維持している。

回覧板の必要性の有無が今日、コミュニティ組織の中で議論されているが、改めて、いかにして、継続的に有効活用できるかの課題は大きい。

- (11) 中学生は、地域に貢献したい思いを持っている。女性は、男性よりも積極的な面が伺える。

男性は、積極的に、地域の課題を理解する努力をしながら、大人社会は、常に、地域の現状を中学生に「見える化」「わかる化」し、共通理解に努めたい。

- (12) 身近な地域社会の中で、ほとんどの中学生は、日常的なふれあい交流や実体験の機会をもっていない回答が85%あった。

しかし、体験があったと回答した中学生15%の内容は、「身内福祉：家族に障害者がいる、親戚の障害者の方と交流」「ご近所福祉：地区のふれあいサロンで地域の高齢者と交流した、ご近所の付き合いを心掛けている」の範囲内で、自然的な内容を回答している。まだまだ「福祉」を構えた受け止め方で、難しいと感じる地域環境でもあるようにも伺える。

こうした面から、一人一人が意識改革をし、誰もが、関われる福祉観を働きかけていく地域づくりを心掛けたい。

- (13) 中学生から、身近な地域社会で、誰もが安心して暮らしていく上で、必要な支援やサービスを求めた結果、「見守り・声掛け（安否確認）」「災害時の手伝い」「簡単な介助・介護」「買い物支援」「話し相手」「移動支援」「ゴミ出し」「定期的なふれあいサロン」「子育て支援」「掃除（草取り）」「趣味・特技の援助」「配食」「調理」等、大人社会に求めた回答とほぼ同じ内容の回答であった。

また、地域参加活動のイメージは、「思いやりのあるもの」「まちづくり」「社会にとって必要」「自ら進んで行う」と前向きな回答結果であり、地域の現状をしっかりと受け止め、支え合う社会を望んでいることが伺える。

- (14) 福祉活動として長い歴史をもつ「赤い羽根共同募金」の理解は、成長過程で、小学生の理解度よりも高い94%の回答であった。直接関わっている「学校募金」をはじめ、地域における「戸別募金」「職域募金」等の意義を、更に理解することを期待したい。

- (15) 「ともに、助け合う地域づくりへの提言」（自由意見）では、中学生から、319件の意見をいただいた。この具体的な意見から、「大人社会に向けた提言」として取りまとめると、

- ①若者にもわかる、地域活動の動きを知りたい。（地域活動の「見える化」「わかる化」）
- ②若者の意見を、地域活動に活かせる機会を考えてほしい。（誰もが参画する地域づくり）
- ③若者も気軽に、地域の行事に参加出来る呼掛けを期待したい。（気軽に参加できる環境）
- ④それぞれの地域の良さをPRしていくことで、住民が地域に関心をもつ。（地域環境）
- ⑤地域情報に、誰もが、容易にアクセスできる情報提供の工夫（広報啓発の開拓）

「“若者発” ご近所福祉かるた」の活用で「赤い羽根共同募金」を学ぶ

「静岡福祉文化を考える会」では、2021年度、静岡県内の小学4年生から6年生対象に、「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました調査」、2023年度、静岡県内の中学生351名対象に「私にとって“ご近所”とは、中学生の意識と実態調査」にそれぞれ取り組みました。それぞれの調査設問「あなたは、赤い羽根共同募金を知っていますか？」の回答結果では、小学生の86%、中学生の94%が「知っている」と回答をいただきました。

小学生の回答では、「どんな活動か、詳しくはわかりません。しっかりと学びたい」「街頭で募金活動をしている人を見かけました」「私の学校でも、福祉活動として赤い羽根共同募金活動に取り組み、集まったお金を町の社会福祉協議会に届けました」と詳しく説明がありました。

中学生は、「内容を理解している」31%、「内容を調べたことがある」13%、「言葉だけは知っている」50%と、回答がありました。こうした、児童・生徒からの回答結果を、大人社会に向けた提言としてまとめると、大人社会は、長い歴史のある「赤い羽根共同募金活動の仕組み」や「赤い羽根共同募金の活用（配分）」そして、「赤い羽根共同募金によって、地域の福祉問題が改善・発展していること」を 学校教育だけに委ねることなく、家庭・家族、身近なご近所で、また職域において、市民が主体となった福祉活動の意義を学び合うことを、心がけていかなければなりません。

「何のために赤い羽根共同募金活動をするの？」→公的制度では、全てを解決できないこと、県民一人一人が出来るささえあいを考えていくこと、「私たちが出来る募金活動を考える」→ 福祉施設や在宅で生活している方々の生活の支援を考える、「私たちが実践した募金活動でどのように地域社会が変わったか」→関係団体からの報告をもとに「福祉教育」を深めていく。

こんなプロセスを大切にしながら、「私が変わる、地域が変わる 住みよいまちづくり」を描いていきたいものです。

「静岡福祉文化を考える会」は、県民の皆様方からの「赤い羽根共同募金」により、「“若者発” ご近所福祉かるた」の創作から、地域福祉教育教材の活用を10年間呼び掛けてきました。そして、このたび、「かるた」の増刷（3版総計300セット）とともに、関係者のご協力をいただき、「かるた活用事例集」の作成につなぎ、さらに、「住民福祉教育」の開拓をめざします。

「かるた」には、各読み札・絵札に「3種類の赤い羽根マーク」を組み入れています。

また、全ての「かるた」に「赤い羽根共同募金」を共に実践活動につなげる「キーワード」を組み入れています。 ぜひ、有効に活用して下さい。

これからの“福祉”を考えるネットサイト

- QRコードから、簡単にジャンプできます。 知識と知恵を身につけましょう。「静岡県共同募金会」のHPにもリンクします。

静岡福祉文化を考える会

協働団体 焼津福祉文化共創研究会



* 静岡福祉文化を考える会 QR コード



* 焼津福祉文化共創研究会 QR コード



静岡発 福祉文化の創造を切り拓く 若者発 ご近所福祉かるた 活用事例集

■ 企画・制作：静岡福祉文化を考える会

〒421-0841 静岡市清水区追分 3-5-17 NPO 法人泉の会内

TEL: 054-367-2878 FAX: 054-367-2884

- 作 画：漫画家 法月 理榮
- 協 力：焼津福祉文化共創研究会 共創社会実現研究会
- 編 集：原崎洋一・大澤雅晴・河野恵介・藤下品子・古屋貴彦・平田 厚
- 発 行 日：令和 6 年 9 月 30 日
- 印刷・製本：株式会社 セイコー社

〒425-0091 焼津市八楠三丁目 5-17

TEL: 054-626-5960 FAX: 054-626-5970



赤い羽根共同募金助成事業により作成しました。